



第10回ESD大賞 受賞校実践集

主 催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

後 援：文部科学省 / 日本ユネスコ国内委員会 / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 / 株式会社教育新聞社

はじめに

Education for Sustainable Development (ESD) は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育といわれています。

地球上の様々な課題を自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、このESDの理念に基づく取組を積極的に実践する学校を奨励する「ESD大賞」を平成22年度に創設いたしました。

本事業は、全国のESDの優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。

10回目となる今年は、全国の小・中・高等学校53校よりご応募をいただきました。

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではございましたが、第10回ESD大賞として、ここに受賞校を発表し、その実践をまとめさせていただきました。

なお第10回ESD大賞は、カシオ計算機株式会社様よりご協力をいただきました。

本冊子が少しでもESD実践の参考・発展へつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

目 次

◆はじめに	1
◆審査にあたって	3
◆講評	4
◆文部科学大臣賞	
広島県福山市立福山中・高等学校	6
◆ユネスコスクール最優秀賞	
東京都多摩市立連光寺小学校	11
◆小学校賞	
東京都杉並区立西田小学校	16
◆中学校賞	
熊本県熊本市立北部中学校	21
◆高等学校賞	
広島県立安古市高等学校	26
◆審査員特別賞	
学校法人静岡理工科大学 星陵高等学校	31
◆ベスト・アクティビティ賞	
名古屋国際中学校・高等学校	36
◆スタートアップ賞	
静岡県立駿河総合高等学校	41

【審査にあたって】

第10回ESD大賞の審査にあたっては、ESDの目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うこと」に基づき、審査を行いました。

加えて、

- ① ESDの目標を実現するための教育活動を組織的・計画的に実践し、その成果を読み取ることができる。
- ② ESDについての指導内容・方法等に工夫改善され、新しい提言が行われている。などの観点も重視されています。

なお、「ベスト・アクティビティ賞」とは、学校や地域の特性を生かしたオリジナリティのある活動、他校にも生かせるアイデアに富んだ取組を行う学校を表彰しています。

「スタートアップ賞」はユネスコスクールに加盟して3年未満（加盟していない学校含む）の学校を対象とし、優れた実践を行っている学校を表彰しています。

賞から外れた学校にも優れた取組が多くありました。各学校におきましては今後一層精進され、ESDの発展・充実に向けた取組となることを期待しています。

文部科学大臣賞 … 広島県福山市立福山中・高等学校

総合的な学習・探究の時間を中心に各教科・科目、特別活動等が連携し、ESDで育成する情報整理力、表現力、課題解決能力、協働、自他の尊重、チャレンジ精神などの資質・能力の育成に努め、その評価については5段階のルーブリックを設定して取り組んでいる。5段階による評価は生徒の成長の姿をかなり具体的に把握できることから、生徒、保護者、教師がESDの意義の理解を深め、ESDの活動の充実に向けて有効に機能している。

ユネスコスクール最優秀賞 … 東京都多摩市立連光寺小学校

小学校の6年間の学校生活を通して持続可能な社会づくりに向けた価値観や意欲、探究活動の能力の育成に向けたESDへの取り組みを児童の発達段階を踏まえて系統的、継続的に行っている。6学年では、これまでの学習の積み上げとして再生可能なエネルギー発電に挑戦し、6年間の活動の成果として駅前のクリスマス・イルミネーションを点灯させ、市民に省エネの大切さをアピールした。小学校卒業後もSDGs達成に向けて各自がテーマを設けて活動できるよう6年間の指導の一貫性を重視したカリキュラム・マネジメントに取り組んでいる。

小学校賞 … 東京都杉並区立西田小学校

人や自然、社会との“関わり”や“つながり”を大切に、グローバル化する世界において持続可能な社会を創る価値観を育成し、全教育課程にSDGsの項目を幅広く取り入れ、低学年から高学年へと発達段階を考慮した課題を設定してESDに取り組んでいる。教室だけでの学びから実感を伴った学びとするため外部関係者の協力を得ての活動は、児童の当事者意識を育み、主体的な活動を促すことにつながっている。児童の主体的な活動であるミミズコンポストの作成や途上国の森林保護に向けてのリサイクル活動は、教師のESDの重要性を再認識させ、SDGsの達成に向けた教育課程の改善に取り組ませる動機ともなっている。

中学校賞 … 熊本県熊本市立北部中学校

ESDの系統的な学びができるよう、学区の幼稚園・保育園、小学校との連携を重視するとともに各教科の指導計画はESDを視点において立て、各教科の単元には環境、伝統文化、安全、防災、健康、国際理解を位置付け、「ESD学びの地図」を作成した。また、ESDの活動を教科横断的に取り組む時間として「総合的な学習の時間」を位置付け、探求的な学びを取り入れたカリキュラムの開発に取り組んだ。生徒は学びを通して「持続可能な社会づくり」に向けた活動としてESD、SDGsの地域への普及活動に努めているが、市議会がこの北部中の活動を取り上げたことから熊本市がSDGs指定都市の指名を受けることになった。

高等学校賞 … 広島県安古市高等学校

学校の校訓である「仰高スピリット」、「グローバル・シチズンシップ」、「ESDの視点」をキーワードとして「総合的な探究の時間」を活動の場としている。1年次ではSDGsについての学習、2年次は個人が主体的に課題を設定して探求学習に取り組み、3年次では、これまでの学習の成果を活かしてSDGs達成に向けた方策を在校生、保護者に提示するとともに「持続可能な社会の実現を目指して」をテーマとしたパネルディスカッションを行っている。この他、生徒の多くは、地域の清掃活動、伝統文化の継承、地域の課題についての話し合い、合同防災訓練など地域の活動には積極的に参加している。

審査員特別賞 … 静岡理工科大学星陵高等学校

身近な生活を通してSDGs達成に向けた活動として、理系という学校の特色を生かした再生可能なエネルギーの開発に取り組んでいる。再生可能なエネルギーとして注目したのがバイオメタンで、3年間の研究の成果としてバイオメタン発生の原理を解明し、その施設を完成させた。バイオメタンは家庭から出る生ごみなどの有機性廃棄物を微生物の働きで可燃性のガスを生成させる再生可能なエネルギーであり、バイオメタンの生成した後のかすは作物栽培の液体肥料として活用できる。現在、小規模なバイオメタン施設を地域に分散して配置しているが、最終的には地域が主体となって運転管理を行うバイオメタン施設を活用した持続可能な資源循環型社会の構築を目指している。

ベスト・アクティビティ賞 … 名古屋国際中学校・高等学校

都会に位置しているという特性を生かし、生徒・教員がグローバルで新しいESD環境づくり、人と人との交流の場の創出に取り組んでいる。その結果、学校は多様な人々が交流と情報の行き交うハブ的な役割を担う場となった。このような環境の中で生徒は実社会に通用するコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身に付けるとともに、学校生活では①多面的な見方、②対話に関する豊かな表現力、③社会に役立つアイデアを提供するなどの思いやりの心情などが見られるようになった。さらに、学校、企業、国や地方公共団体、NPOなどと積極的に関わり地域のESDの推進に貢献していることなどが評価された。

スタートアップ賞 … 静岡県駿河台総合高等学校

地域と連携した開かれた学校づくりを目指すとともにESD for SDGsを意識した地域社会の発展に貢献できる教育活動に取り組んでいる。豊かな生き方・在り方・働き方を追求するキャリア教育の充実と身に付けた知識・技能を持続可能な社会づくりのために活用できる態度の育成を重視した“ESD for SDGs”(=「キャリア教育with SDGs支援プログラム」)を策定し、ホールスクールアプローチによる学校運営に取り組むとともに各教科・科目、課外活動においてユネスコスクール活動を展開している。

文部科学大臣賞

広島県福山市立福山中・高等学校
研究企画主任 上山 晋平

「グローバルな社会・地域社会で活躍する資質・能力は、どうすれば育成できるのか」
～ESDは「持続可能な社会づくり」、「資質・能力の向上」、「学校の教育改革」につながる～

1 はじめに

本校は人口約47万人の広島県福山市にある。福山市では、地元企業や豊かな自然環境とのつながりを特色として、市内の全小・中学校でユネスコスクールへの加盟を積極的に進めている。

本校は、高校創立1899年で、2004年に中学校を併設した、公立の併設型中高一貫教育校である。学校の教育目標は、「創造的な知性と豊かな心の調和的な発達を図り、国際社会に貢献できる人間を育成する」。学校の特徴は「国際交流」（海外姉妹校交流）と「ESD」（持続可能な開発のための教育）で、ユネスコ・スクール（UNESCO）、サステイナブル・スクール（文科省委託事業）、ハッピースクール（UNESCO）指定など、ESDを軸に学校づくりを進めている。



2 本校ESDのねらい

総合的な学習（探究）の時間を中心に、教科や特別活動と関連づけた3つのプロジェクト（地域課題解決、国際課題解決、生き方・在り方探究）を通して、持続可能でグローバルな社会・地域社会で活躍する資質・能力をもった生徒を育成する。

3 本校ESDのキーワード

- ・ホールスクールアプローチ
- ・学校づくり
- ・3プロジェクト
(ローカル、グローバル、キャリア)

4 ESD実践の特徴

本校のESD実践の特徴は次の3点である。

- ① ESDを中心とした「ホールスクールアプローチ」で「学校の特色づくり」を行う。
- ② 新規事業開発中心でなく、既存の取組をESDの観点で整理する（「働き方改革」にも配慮）。
- ③ 生徒は中高6年間で3つのプロジェクトに取り組み、「資質・能力」を向上させる。

これらの詳細は、後で述べる。

5 研究課題

本校の研究課題（問い）は、「グローバルな社会・地域社会で活躍する資質・能力は、どうすれば育成できるのか」で、副題は、「ESDの推進は、学校の教育改革推進につながる！」である。

新学習指導要領に対応した学校改革を模索する学校は全国に多いと思う。本校も同様で、中高一貫校となって国公立大学進学率などの開校時目標を達成したことで、次の教育の方向性を模索した。

その際、広島県および福山市が示した今後の教育の方向性に則り、本校の実践を整理・構造化するとともに、「次代に必要な資質・能力」を育む教育内容を研究・実践する方法を校内で議論した結果、ESDが最もふさわしいとの結論に達し、本格的にESDを軸とした研究を推進している。

学校全体でのESD推進を通して、生徒の資質・能力を育むとともに、教育内容の改善など学校改革の推進につながる事がわかってきた。

6 地域や関係機関と連携したESDの推進

次の機関と連携してESDを推進している。

- 福山市役所、福山商工会議所、地元企業

- 福山市立大学 都市経営学部
- アジア・ユネスコ文化センター（ACCU）

7 実践内容

本校の特徴は、「ホールスクールアプローチでの持続可能な学校デザイン」にある。そこで、以下10ステップに分けて本校の取組をご紹介しますので、これから「ESDの観点で学校づくり」を進められる学校の参考になればと思う。

ステップ① 「今後の学校教育の方向性」や「育てたい生徒像」は？

まずは学校が今後どのような姿を目指したいのか、ビジョンを考えることが第1ステップである。本校は、「新たに創りすぎず、これまでの実践を活用する」と「次代に求められる資質・能力を育む」という2つの観点で教育内容を検討し、ESDを本校教育改革の軸に推進することに決めた。

ESDは、「持続可能な社会の創り手を育む」と記された新学習指導要領との親和性が高い。本校は、教育目標に照らして学校全体で育てたい生徒像を「グローバル人材」と定めた。（p.10参照）

ステップ② 本校で育てたい力は何か？ (生徒に身につけさせたい6つの資質・能力)

続いてステップで1設定した「学校で育てたい生徒像」が備える（であろう）資質・能力はどのようなものなのかを考える。生徒に身につけさせたい資質・能力を考える際に本校が特に参照したのは、次である。

- ・自校教育の強み・弱み（生徒、保護者、地域の方の思いやアンケート結果など参照）
- ・国立教育政策研究所の示す「7つの能力・態度」（批判的に考える力や他者と協力する態度など）
- ・高大接続改革答申の「学力の3要素」（思考力・判断力・表現力・主体性・多様性・協働性など）

これらを参考に自校の課題を整理する。例えば本校は、「情報整理力」、「表現力」、「課題解決力」の3つの能力と、「協働」、「自他の尊重」、「チャレ

ンジ精神」の3つの資質に整理した。

ステップ③ 自校の取組をどう構造化するか？

続いて、ESDの教育内容を考える。このときは、次の国立教育政策研究所の文言が参考になる。

- ・ESDで取り上げる内容は必ずしも新しいものである必要はない。
- ・教育をESDの視点で捉え直し、「持続可能な社会の構築」という共通目的を与えるものである。
- ・取組を結びつけることにより、既存の取組の一層の充実発展を図ることを可能にする。

これらを受け本校でも、「現状を生かして新たな負担を少なくする」方向性を定めた。これは、働き方改革を考えても、多くの人の同意を得るためにも大切な視点である。まさにサステイナブルな実践である。負担が大きすぎる実践は続かない。続かないと変容は生まれない。

この結果、本校ではそれまで多種多様に行われてきた中高6年間の教育活動を、以下の3つのプロジェクトに分類することができた。

- ・地域課題解決プロジェクト（ローカル）
- ・国際課題解決プロジェクト（グローバル）
- ・生き方・在り方探究プロジェクト（キャリア）

ステップ④ 「評価」はどうするか？

次に、自校で設定した資質・能力をどう評価するのかを検討する。本校では管理職、教育研究部、各部主任が集まって何度も熟議を重ね、ルーブリックを作成した【p.10参照】。

ポイントは以下の3点である。

- ・評価のレベルは5段階で、レベル5は最難関である。（困難な目標を示し生徒の挑戦を促す。）
- ・年に3度（春、秋、冬）測定し、進捗度を測る（中高ともに3年間で同一用紙を使用する）。
- ・評価で4と5を選んだ生徒には、その根拠（伸ばした活動）を記述する。

ステップ⑤ 「実践のまとめ」はどうするか？

学校づくりを進めるうえでは、「実践のまとめ」(実践記録)の作成も考えたい。指導の工夫や感想が残り、次年度の改善に役立つ。さらに他校に渡すと喜んでいただける。本校は報告書の詳細をESD実践前に定めた(1活動2ページの様式、目次、作成担当者)。本校実践資料(約80ページ)は本校ウェブサイトからダウンロードできる(ESD関係→報告書)。

ステップ⑥ 3つのプロジェクトの実践

実際に各学年の教育活動を実践する段階である。本校では、先述したように、すべての活動を以下の3つのプロジェクトに収束して、活動同士が学年を越えて関連して深まるよう仕組むようにした。

- (1) 地域課題解決プロジェクト
「ふるさと学習」(中1)、「地元企業ガイドブック作成」(高1)、「夢チャレ」(高2)、「高大連携事業」(高2)等
- (2) 国際課題解決プロジェクト
国際理解(中3)、海外修学旅行でマレーシアの高校生とSDGsプレゼン・ディスカッション(高2)、模擬国連(有志)等
- (3) 生き方・在り方探究プロジェクト
「自分発見学習」(中1)、「職場体験」(中2)、「ライフプラン」(高1)、「課題研究」(高3)

ステップ⑦ 学校ビジョンにESDを反映

育てたい資質・能力やそれを育てる中心的な活動が定まると「学校の方向性」が明確になる。その姿はぜひ学校ビジョンにも反映させておきたい。ESDの取組が複数年となり、より持続的になる。

本校では次のようにESDを反映したビジョンを取り入れた(3つのビジョンのうちの1つ)。

- 3) 地域課題・国際課題について探究し、持続可能な社会の担い手となる生徒を育てる。

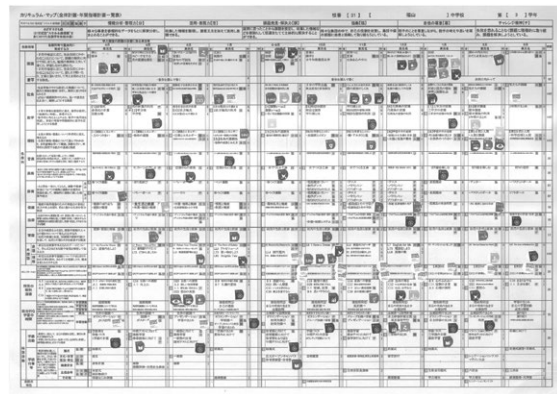
ステップESDの推進⑧ 保護者にも周知

学校全体が進む方向性が明らかになると、PTA総会などを通して、学校長から次のような内容を保護者にも周知し、理解と協力を仰ぎたい。

- ・社会の変化とそれによる求められる力の変化に伴い、大学入試も本校の教育も変わっている。
- ・本校で生徒に育みたい資質・能力は〜で、具体的な活動(プロジェクトなど)は〜である。
- ・生徒は校内外の活動に積極的に参加している。

ステップ⑨ 各教科とESDの関わりは？

ESD開始時は、実践の中心が総合(探究)学習や特別活動であることが多い。ある程度進むとESDの観点における教科実践の充実も考えたい。各教科の実践を「見える化」するのに有効なのが、「ESDカレンダー」である。広島県福山市では「カリキュラムマップ」として「資質・能力」と「全教科の単元」をA3判1枚で作成している。本校はそれにSDGsシールを教科会で貼る作業を通して、共通項目の把握に努めた(拡大したものはステップ⑤の本校実践資料参照)。



ステップESDの推進⑩ 教科でのESDは？

各教科のつながりが把握できたら、教科でのESDの実践を進める。「全教科でSDGsを実践しよう」と取り組むと、ESD実施率と各教員のESD理解度が高まる。

たとえば本校では、SDGsに関する授業を全員が実施し「SDGs授業実践集」を作成した。全教職員(約80名)が1人2ページ(記名入り)の実践レポートを作り、冊子にまとめ、公開研究会で校内外の人と学び合った。SDGsのよさは、他教科からも学び合えることである。



8 成果と課題

(1) 成果

学校全体の成果は、次の3点である。

- ①ESDを中心としたホールスクールアプローチで学校の特色づくりに成功する。

ESD実践前は、(狭義の)学力重視の地域の進学校が、それに加えて「国際交流」と「ESD」を特色とする学校に変容を遂げた。学校教育目標、学校ビジョン、授業内外の学び、地域・国外連携まで幅広くESDの視点で教育活動を整理し実践できた(ホールスクールアプローチ)。

- ②新規事業開発中心でなく、既存の取組をESDの観点で整理する。

ESD導入により、育みたい資質・能力と教育活動が構造化できた。新規事業導入で負担を過度に増やさず、現状を活かして特色づくりに成功した意味で、働き方改革に配慮した取組といえる。

- ③生徒は6年間で3つのプロジェクトに取り組み、スパイラルに資質・能力を向上させる。

生徒は中高6年間で、上述した3プロジェクトに取り組み、「地球・地域の持続可能性の向上」と「個人としての資質・能力の向上」に励む。

その結果、中高6学年の資質・能力の平均(ルーブリック評価)は、第1回(春)2.0から第3回(冬)2.8と、全学年で成長した。ESDを2年間実施した学年の平均は0.9伸び、1年間の学年では0.7である。ESDは長期間実施した方が資質・能力が伸びることが明らかになった。

また、ESD導入で生徒が校外活動に積極的に参加するようになっていく。国際プログラム参加者は増加し(2016年:40人→2019年:65人)、全国規模

で活躍する生徒も増えている(観光甲子園グランプリ、全日本高校模擬国連4年連続5度出場、フィリピン国際ボランティアなど)。

(2) 課題

課題と今後の展望は以下の通りである。

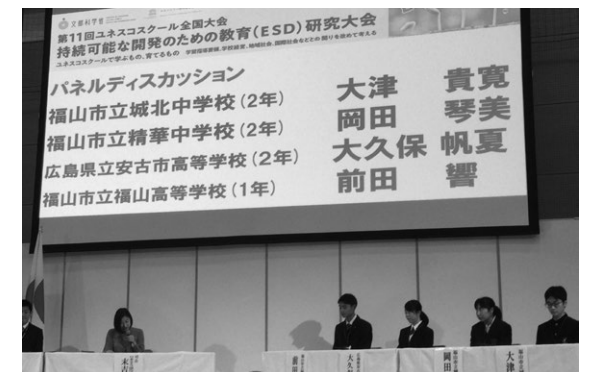
- ①各授業にESDのアプローチをさらに取り入れる。(課題解決・探究的な学びの推進)
- ②生徒主体のESD活動を一層推進する。(生徒が取組を提案し実践)
- ③資質・能力ルーブリック評価追跡を長期的に行う。(資質・能力の育成に資する)
- ④市や企業と連携しSDGsに関連する地域の課題解決に力を注ぐ。(地域連携型)
- ⑤他校(国内外)との実践交流を無理なく増す(学びと刺激の共有)。

9 おわりに

2019年11月30日に行われた第10回ESD全国大会では、本校生徒(高校1年生)がパネルディスカッションに登壇し、広島県教委主催の「ワールドピースゲーム」で学んだことを報告した。(国の代表の役割を担って、地球温暖化や領土などの様々な国際課題の解決に挑み、平和な世界を築くシミュレーションゲームのこと)。

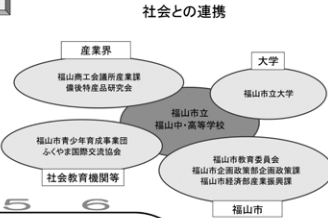
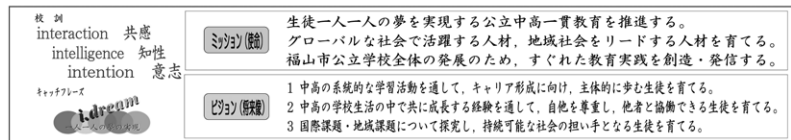
彼は、「国際問題や地元企業の課題の解決に向けて、学校の授業と学校外の活動の両方に意欲的に取り組んでいきたい」と述べている。

本校は、今後もESDを軸にした学校づくりを進めることで、「持続可能な社会づくり」と、生徒個々の「資質・能力の向上」、さらに学校の「教育改革推進」を三位一体で進めたいと思う。



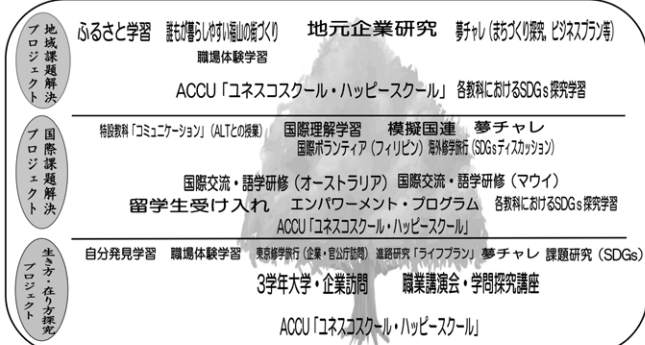
福山中・高等学校 「グローバル人材育成」研究構想図

学校教育目標 創造的な知性と豊かな心の調和的な発達を図り、国際社会に貢献できる人間を育成する



育みたい資質・能力 めざす生徒像

- 情報整理力** 課題解決や新しい価値を創造するための知識や情報を獲得し、整理・分析することができる生徒
- 表現力** 課題解決のために必要な知識・技能を創造的・探究的に活用・表現することができる生徒
- 課題解決力** 生活や社会(地域や国際社会)における課題を発見し、解決することができる生徒
- 協働** 価値観の多様な他者と協働して、集団や社会に貢献する態度を持つ生徒
- 自他の尊重** 個人的・社会的責任を重んじ、他者を尊重するとともに、自己肯定感を高めようとする態度を持つ生徒
- チャレンジ精神** 高い志を持ち、新しいことや困難なことに対するチャレンジ精神を持つ生徒



このシートは3年間使います 「福山中・高等学校で育みたい資質・能力」ルーブリック(目標達成度の評価表)

(1) 表中の①～⑥は、皆さんが「21世紀の社会で活躍する」ために、学校内外の授業や活動を通して特に身につけてほしいと考えている資質・能力です。①～⑥の各項目(3つの能力と3つの資質)について、レベルごとの説明文を参考に、あなたが現在到達していると考えられるレベルの□に大きな✓をつけてください。その後、下記の「レベル記入欄」にそれぞれのレベルを数字で書き込んでください。(どれも当てはまらないと思う場合は「1」をマークしてください。)* 裏面に用語の説明があります。

本校で育みたい「3つの能力」と「3つの資質」	【能力(スキル)】						【資質(気質・特性・情意・態度)】																	
	①情報整理力	②表現力	③課題解決力	④協働	⑤自他の尊重	⑥チャレンジ精神	①情報整理力	②表現力	③課題解決力	④協働	⑤自他の尊重	⑥チャレンジ精神												
レベル1	□テーマに関連して得られたデータや情報をおおまか理解できる。	□自分が学んだことを(原稿などを)読んで伝えることができる。	□自己の生活や社会などについて考えたことがある。	□他者と一緒に活動している。良い関係で話している。	□自分が学んだことを考えている。	□人から指示されたことはやっている。	◆課題解決や新しい価値を創造するための必要なデータや情報を分析・整理することができる。	◆課題解決のために必要な基礎的な知識や技能を創造的・探究的に活用・表現することができる。	◆様々な場面で課題を発見し、最適解により近い解決方法を見つけることができる。	◆価値観の多様な他者と協働し、集団や社会に貢献し解決しようとしている。	◆個人的・社会的責任を重んじ、価値観の多様な他者を尊重するとともに自己肯定感を高めようとしている。	◆高い志を持ち、様々な場面で課題解決のために新しいことや困難なことに自ら挑戦している。												
レベル2	□テーマに関連して得られたデータや情報の要点を正確に理解し、人に説明することができる。	□学んだことに加えて、他者の意見・アイデアを活用できる。自分の言葉で発表や説明ができる。	□自己の生活や社会などについて、改善したい(追究したい)ことが1つ以上ある。	□自己の責任をもち、全員が目標達成するために、チームメンバーに助けを求め、かつ支援している。	□人からの指示を待たずに、他者に迷惑をかけるようなルールやマナーを守って責任を持って行動している。	□人からの指示を待たずとも、自発的に行動(学習)している。	□得られた情報に加え、テーマに関連するデータや情報や自分で書籍やネット等で検索しおおよその特徴を理解できる。	□複数の意見・アイデア・計画を合わせて、より良いものを作るができる。それを相手に分かりやすい方法で伝えることができる。	□地域や国際社会について自ら解決したい課題を見つけて、課題の原因を自ら調査・探究している。	□課題解決に向けてチームメンバーに自分のやる気を示したり、他者の考えを認めたりしている。	□地域やグローバル社会の一員として、個人的・社会的責任を重んじ、他者を尊重するとともに、自己肯定感を高めている。	□志を持ち、課題解決のために自ら新しいことや困難なことに挑戦している。												
レベル3	□既存の情報と自分が集めたデータや情報を見て特徴を正確に理解し、その資料を「分類・比較・対比」などしてまとめる。	□独自のアイデアや計画を創造し、校内で分かりやすい(課題力のある)発表・発表ができる。	□地域や国際社会で見た課題の原因を追究し、実行可能性や解決のメソッド・モデルなどを考えて様々な視点から改善策を提案する。課題解決のために他者を巻き込んで行動している。	□課題解決に向けて新しい提案や別の考えを示し、集団のやる気を高めている。また、集団が達成したレベルで課題を完成させるのを率先して助け、社会に貢献している。	□地域やグローバル社会の一員として、個人的・社会的責任を重んじ、他者を尊重するとともに、自己肯定感を高めている。	□理想を追求し高い志を持ち、様々な場面で課題解決のために新しいことや困難なことに自ら挑戦している。																		
レベル4	□課題解決や新しい価値を創造するために効果的な資料を複数集め、正確に分析・整理し、「分類・比較・対比」に加え「予測・提案・創造・発明」などして新しい情報を生み出している。	□誰もやっていないアイデアで多くの人に影響を及ぼす計画を立て実現しようとする。校内外で巧みな表現(ジェスチャー・声・文章等)で内容を発信できる。	□地域や国際社会で見た課題の原因を追究し、実行可能性や解決のメソッド・モデルなどを考えて様々な視点から改善策を提案する。課題解決のために他者を巻き込んで行動している。	□課題解決に向けて新しい提案や別の考えを示し、集団のやる気を高めている。また、集団が達成したレベルで課題を完成させるのを率先して助け、社会に貢献している。	□地域やグローバル社会の一員として、個人的・社会的責任を重んじ、他者を尊重するとともに、自己肯定感を高めている。	□理想を追求し高い志を持ち、様々な場面で課題解決のために新しいことや困難なことに自ら挑戦している。																		
レベル5	□課題解決や新しい価値を創造するために効果的な資料を複数集め、正確に分析・整理し、「分類・比較・対比」に加え「予測・提案・創造・発明」などして新しい情報を生み出している。	□誰もやっていないアイデアで多くの人に影響を及ぼす計画を立て実現しようとする。校内外で巧みな表現(ジェスチャー・声・文章等)で内容を発信できる。	□地域や国際社会で見た課題の原因を追究し、実行可能性や解決のメソッド・モデルなどを考えて様々な視点から改善策を提案する。課題解決のために他者を巻き込んで行動している。	□課題解決に向けて新しい提案や別の考えを示し、集団のやる気を高めている。また、集団が達成したレベルで課題を完成させるのを率先して助け、社会に貢献している。	□地域やグローバル社会の一員として、個人的・社会的責任を重んじ、他者を尊重するとともに、自己肯定感を高めている。	□理想を追求し高い志を持ち、様々な場面で課題解決のために新しいことや困難なことに自ら挑戦している。																		
レベル記入欄	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬
(2)項目	本人	4年	組	番	5年	組	番	6年	組	番	名前	男	女	部活動										

(2) 評価レベル「4」「5」を選んだ人は、その項目の能力や価値を特に伸ばしたと考えられる活動や場面を「(2)項目」欄に「具体的に」記述してください(5W1Hをできるだけ含めて)。例) ●教科や総合学習(活動や取組) ●校内外の自主研究・活動(ボランティア等) ●行事(文化祭・体育祭・修学旅行等) ●生徒会活動 ●部活動 ●定期テストやパフォーマンステスト ●資格・試験 ●留学 他

▲【ルーブリック参考】岡山県立倉敷南高等学校「21世紀型能力」ルーブリック/三宅なほみ(監訳)ほか「21世紀型スキル」北大路書房

持続可能な社会の創り手の育成

～地域から世界へつながる連光寺のESDの実践～

1 はじめに
本校では、平成22年度より、ESDをベースにした研究を進めてきている。
連光寺小学校のある地域は、古くから人々が暮らしてきた歴史があり、昔からの里山が公園として残っている。ESDに取り組む以前から、こうした地域の良さをいかした教育活動を行うことで、地域の施設や人々と連携した学習活動を確立してきた。この研究をESDへ発展させることは、本校の特色ある教育活動の充実につながると考え、舵をきり10年近くを経てきた。現在の姿は、長い時間の中で、その時々々の課題に向き合いながら試行錯誤を繰り返し、築き上げられてきたものと言える。

ESDに向き合う中で、地域との結びつきを一層深いものにし、さらに、児童は、地域の外にも目を向けて行動するようになってきた。6年間を通して、発達段階や学習活動のつながりを考えてESDで育成する能力・態度を育てようとすることで、学年間のつながりのある生活科・総合的な学習の時間のカリキュラムをつくりあげることができた。このようにして、現在の連光寺小学校のホールスクールが確立されてきている。

さらに、平成29年度と30年度は、「東京都教育委員会 持続可能な社会づくりに向けた「教育推進校」「多摩市公立学校 研究奨励校」の指定を受けた。これまで以上に連光寺ESDの充実を図るため、育成する能力・態度をより一層、現代の課題に合った内容にしていくことや、新学習指導要領の実施に合わせ、カリキュラム・マネジメントを充実させ、主体的な児童の姿を目指した授業改善を行うことが必要となった。現在、研究テーマを「教育課程全体で取り組む

ESDの実践と教育活動の工夫」、サブテーマを「生活科・総合的な学習の時間を軸とした連光寺カリキュラム・マネジメント」とし、研究に取り組んでいる。

2 実践内容
(1) ESDで育む6つの能力・態度
6年間を通して地域で活動する学習活動では、次のア、イ、ウ、エ、オ、カの6つの力を育てることを目指している。

- 〈知識及び技能〉
- ア 環境や社会の仕組みを理解する。
- イ 学び方を身に付ける。
- 〈思考力・判断力・表現力等〉
- ウ 課題をつかみ、考え、判断し解決する。
- エ 価値を見だし、思いや考えを伝える。
- 〈学びに向かう力・人間性等〉
- オ 人・自然・社会に関心をもち、意欲的に関わる。
- カ 協力してよりよい社会をつくらうと行動する。

新学習指導要領で掲げられる3つの資質・能力に対応している。生活科や総合的な学習の時間で育てる能力・態度をこのような形で捉えると、教科とのつながりを明確に示すことができ、カリキュラム・マネジメントを進める上で有効であった。

さらに、この6つの能力・態度は、各学年の発達段階や学習内容に合わせ、具体的な内容に整理している。各学年が学習を進める中で、児童の育ちを見つめる指針として活用している。また、児童自身も、この指針をもとにつくられ

たルーブリックをもとに学習の振り返りを行い、自分たちの成長を見取っている。

(2) カリキュラム・マネジメント

新学習指導要領で示されたカリキュラム・マネジメントについては、各学年の実践の中で一部触れたが、毎年工夫をして実践を重ねている。その中で教科や単元とのつながり方には3つの要素があると考えた。

1つ目の要素は、知識・技能を支える学習内容によるつながりである。社会科や理科につながる単元が多い。2つ目の要素は、能力・態度を育てるつながりをもつ教科の単元である。特に言語活動を支える国語科とのつながりは大きい。3つ目の要素は、学んだことを生かすつながりのある教科や単元である。この3つの要素を含んだカリキュラム・マネジメントを新・ESDカレンダーとして表した。さらに、実践を通して効果を検討し、6つの力の育ちを探っている。

こうした結果、ESDを目指した効果的な学習活動が行われ、ホールスクールやESDが一層確立されていった。「持続可能性」を意識した学習を教科・領域の壁をこえて6年間行うことで、6つの力を育てることにつながっていった。

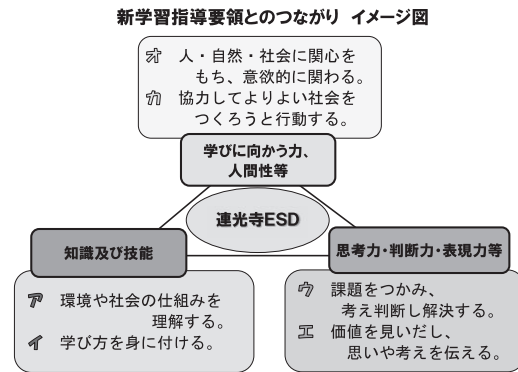
(3) 6年間を通した連光寺カリキュラム

① 1年生の主な学習活動

一年間、季節を追って校庭や学区の野原や公園で、生き物や樹木、草花などに触れ合ったり、友達と一緒に、自然や身の回りの物を利用した道具で遊んだりしながら、自然と関わる楽しさや自然の不思議さに気付く活動をしている。

活動後には、図工で絵を描いたり、国語で作文に書いたりしてまとめている。自分の思いや考えを伝えることを通して、季節の移り変わりを感じながら、学校の周りの自然を大切にしたい気持ちを育んでいる。

こうした活動は、他学年や地域の保育園、幼稚園、また地域の人々との交流の場にもなっている。



公園で虫取り



ヤギのお世話

② 2年生の主な学習活動

一年間を通した「まちたんけん」の活動では、地域と深く関わる。1学期は、地域の公園などを中心に、楽しいところやひみつを教え合い、探検する。2学期は、関心をもった場所の探検をし、地域の人々との交流することで、地域と自分との関わりに気付き、親しみをもって接することができるように活動していく。3学期には、「連光寺のすてきなことを伝えたい」という思いを大切に地域と関わることで、自分が住む町への愛着をいっそう深めることができるように活動する。



消防団の人にインタビュー

また、校内で飼育しているヤギの世話を担当し、エサやり・掃除・散歩などを通して生き物への理解を深めている。この活動は、秋に1年生へバトンタッチする。この他にも様々な場面で低学年は交流を行いながら、活動を引き継いでいく。

③ 3年生「トライトライ」

一年間の活動を通して、総合的な学習の時間の学び方の基本を身につけていく。

1学期は、連光寺の歴史や自然をテーマに探究活動を進め、仲間と協力して地図に表すなどの活動を行っている。

2・3学期は、地域の施設や人々と関わりながら、地域のために自分たちができる事を考え、計画して行動する。



高齢者施設でお手伝い

主体的に「課題発見・計画・実施・発信・行動」に取り組むことを通して、仲間と協働で活動したり、自分たちの思いや考えを発信したりする力を養っている。インタビューの仕方やまとめ方、発表の仕方などは、国語の学習とのカリキュラム・マネジメントを意識して計画している。

ここでは、保護者や地域の方々をはじめとし、都立桜が丘公園や地域にある複数の高齢者施設、また多摩市福祉館などの公施設と深く連携をとり、活動を進めている。

ESDカレンダー

○上段は「能力・態度を育む学習活動」と「知識・技能を支える単元」、下段は「ふれあいと表現」と題した「学びを生かす・深める」学習や単元が記されている。

○赤、緑、黄色の矢印でつながりの関係を示している。

多摩市立連光寺小学校 平成30年度 ESD カレンダー (6年生)

【目標・目指す姿(能力)】 知識・技能 環境や社会の仕組みを理解する。 思考・判断・表現力等 課題をつかみ、考え判断して解決する。 学びに向かう力(人・自然・社会)に関心をもち、意欲的に関わり、協力してよりよい社会をつくろうと行動する。 学ばせたい姿(態度) 環境や社会に関心をもち、意欲的に関わり、協力してよりよい社会をつくろうと行動する。

学習活動	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
知識・技能を支える単元	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。
能力・態度を育む学習活動	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。
ふれあいと表現	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。	環境や社会の仕組みを理解する。

④4年生「川は自然の宝箱」

一年を通じて多摩川を舞台に探究活動を行っている。

春に地域の湧水や小川の流れをたどり、多摩川までつながることを確かめ、多摩川での活動をスタートさせる。川での共通体験を行ない、それぞれの興味や関心にそって、個人の追究テーマを決める。子どもたちの選ぶテーマには、魚・石・水質・鳥・植物などがあり、課題別にグループで活動していく。夏から秋にかけて、専門家の方に調査方法を教えてもらい、探究活動を進めていく。



多摩川でガサガ

この時期に合わせ、社会科では飲料水や下水処理の学習を行うカリキュラム・マネジメントを行う。社会科見学でも多摩川の下流での体験活動や上流の見学を行い、多様な視点から川についての見方を深め、関心を高めている。

秋から冬にかけては、活動を通して分かったことや、図書資料などを活用して調べたこと、考えたことなどを作品にまとめて、発表会を行う。この後、社会や道徳などの学習とも関連させながら、川の自然を守るために自分たちでできることをととして考え、行動や発信をしていく。

こうした多摩川の学習を支えてくださるのが、博物館の学芸員の方や多摩市水辺の楽校の方など、地域にいらっしゃる専門家の方々である。

⑤5年生「連光寺 SATOYAMA プロジェクト」

川の源である地域の里山を舞台に、前の学年で学習したことをもとに、さらにESDを発展させていくのが5年生の探究活動である。

地域には、里山の景観を守るために活動をしているボランティアの方々がいる。児童は、この里山ボランティアの方々と谷戸田での米作りを行うことで、谷戸田の環境保全活動を行っている。



谷戸田で田起こし

さらに、こうした活動と並行して、個人のテーマをもち、里山での動植物の調査をしながら、里山の価値や環境を守ることについて考えていく。探究活動を進めるにあたっては、高尾森林センターや動物水族館協会から来て下さる専門家の先生方に協力してもらっている。

3学期は、炭焼き体験や森林教室などの学習を通して、人間は自然がどのように関わってきたのか考える。環境について考える中で、地球温暖化など世界の課題にも目を向けるようになる。



里山で炭焼き体験

⑥6年生「未来に優しいエネルギー」

これまでの学習の中で、環境を守るために自分たちができることを考えてきたが、さらにグローバルな視点ももち、外の世界と結びついていくことを目指している。

地球温暖化の現状や原因を理解し、環境を守るために自分たちには何ができるのか考える。ここでは、理科の発電の学習とのカリキュラム・マネジメントをはかり、風力発電や太陽光発電などに取り組むことで、自然エネルギーの可能性を探り、持続可能な社会の在り方を考える。さらに、国際連合の「持続可能な開発目標SDGs」について学びながら、これからの社会について考えていく。



発電した電気で街を照らす

こうした学習の中で、他校との交流や、地域の催しへの参加を通して自分たちの考えを発信し、環境を守るための意識や行動力を高めていく。また、企業やNPO団体の出前授業や、環境を守るために活動している人と一緒に行動することなどが、児童の意欲や関心を支えてくれている。



作った電気で発電

⑦特別支援教室

学習を特別支援の視点から、1年生から6年生までの活動を支援している。ユネスコの「誰も置き去りにしない」との理念のもと、人との違いを受け入れることを中心に各学年の指導を進

め、多様な社会を見つめる価値観を養っている。

⑧発表会

年度末の「生活・総合的な学習の時間発表会」は、全児童が発信と活動を共有する機会である。環境委員会を中心としたグローブ活動も集会の中で発表し、身近な環境の変化や問題を伝え、学ぶ意欲を高めている。

3 成果と課題

教育課程全体でESDの実践や教育活動の工夫を行なっていくためには、指導者が個々に実践するだけでなく、学校全体で見つめ合うことが必要である。「子どもたちは持続可能な社会をつくる力を身に付けているのか」「その力をつける授業ができてきているのか」互いの授業を見合いながら教育活動の工夫を図ることで、ホールスクールが確立された。このことは大きな成果である。さらに、こうした学びの連携は、子どもたちの主体性をつくり、それはESDへと向かう児童の姿に結びついているととらえている。ESDで育てる能力・態度として前述したイ、ウ、エ、オは達成できていると考えている。

今後の課題は、ESDへ向かう児童の姿をより確かに見取ることである。これまでの研究の中では、ウェビングマップやアンケートを活用することによってある程度の児童の成長を評価してきた。しかし、より主体的な学習を進めていくためには、子どもたち自身が自分の学習の様子を明確な視点をもって見つめていくことが大切である。そのためにも、児童自身によるルーブリックの活用、ポートフォリオ評価など、取組はじめたことを継承することが大切である。

小学校賞

東京都杉並区立西田小学校
副校長 新井 雅晶

学校から地域に広がるSDGsの学び ～変わり始めた西田小学校の教育～

1 はじめに

杉並区立西田小学校は、ESDやSDGsの学びとして「気付き・考え・行動する子」を教育目標に、全教育課程を見直し、人や自然、社会との「かかわり」や「つながり」を大切にしながら、グローバル化する世界において、持続可能な社会を創る個々人の価値観の育成を目指している。

本校の実践の特徴は以下の3つである。

- 「統合的なSDGsの学び」を視点とした教育課程の見直し
- 地域への発信活動とSDGsの浸透
- ホールスクールアプローチを通じた児童の主体的な活動と学校の関わり

これらの活動を通して、子供たちは、SDGsの課題に向けて当事者意識をもち、持続可能な社会づくりに向けた価値観をもって取り組むようになってきた。また、子供たちの教育に携わっている教師たちにも、SDGsを解決に関わるものとしての意識が芽生え、「主体的・対話的で深い学び」を実現する指導の在り方や指導観において変容の兆しが見られる。ESDやSDGsの学びを推進することは、児童の主体的な学びを保障することにつながるとともに、地域の核となる、これからの学校の在り方や方向性を明確に示すものであると確信している。

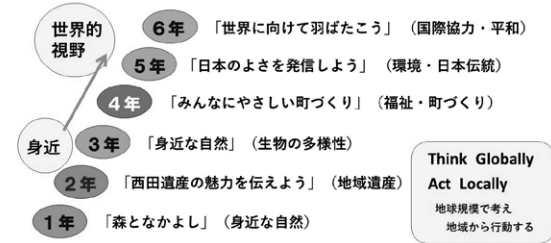
2 実践内容

(1) 統合的なSDGsの学びを視点にした教育課程の見直し

ESDに取り組み始めた4年前に、本校では、Think Global Act Locallyの発想の基、SDGsの視点を多く取り入れ、発達段階に応じて1年間かけて課題追究する学びを位置付けた。低学年ほど生活に根差した課題にし、高学年では、地球市民と

しての発想をもてるように配置し、6年間を通してSDGsを統合的に捉える工夫をしている。この学年テーマを決めた際には、理科や社会科、国語科で学習する内容も配慮し、各教科との関連が図ることができるように工夫している。その結果、教科等横断的な学習が可能となり、効果的なカリキュラムマネジメントができるようになった。

6年間のテーマを決める



実践をする中で、各学年のテーマの位置付けは、課題追究の仕方を学ぶ上でも効果的な配置であると考えている。例えば第2学年の「地域遺産への学習」は、人とのつながりを通して、周囲に町の良さを伝えたいという強い思いをもたせることを目当てにするに對し、3年の「身近な小動物」の学習は、理科から学んだ科学的発想を根拠に、調べたり行動したりする内容になっている。さらに、第4学年の「みんなに優しい町づくり」では、学校外の不特定多数の人を相手に行動する学習となり、課題把握や解決方法に見通しをもって取り組む必要がある。高学年においては、平和な社会を目指すためには環境問題もからむこと等を考えると、第5学年で環境問題を取り上げ、因果関係や相互の関係性を押さえた思考を学ばせることが大切である。SDGsの学びも発達段階に適した切り込み口があると考えている。

(2) 単元デザインと個の学習へのつながり

本校では、学年の単元をデザインする際に、「課題設定」から「まとめ・表現」、または「行動する」までの過程を一つのサイクルとして、複数のサイクルを重ねることで、SDGsの視点を取り入れた学び（個人の持続可能な社会に向けた価値観）が深まると捉えている。

また、単元を進める際には教科等横断的な指導を取り入れ、各教科・領域との関連や適時性を考え、効果的な指導を実施している。



学年当初の導入の仕方は様々であるが、第6学年では、「平和とは何か」という本質的な問いを提示することで情報収集の必要性に気付かせる。また、今年度の第5学年は2100年の天気予報を見せることで環境破壊の様々な課題と原因を探ろうと呼びかけた。第3学年の総合的な学習の時間は、理科のモンシロチョウの学習を起点に、ヤゴの救出活動を受けて身近な小動物に目を向けさせている。これらは年度当初に立てたESDカレンダーの計画に沿って行われる。

課題追究のサイクルの作り方は、追究する内容の違いや関わる対象の違いによって段階に分けている。例えば、第6学年では、1次を紛争や難民について現状を知る段階とし、UNHCRやワールド・ビジョン・ジャパンの方から紛争の現実を聞く場にしている。2次は「平和の在り方」を社会科の国連機関の学習や諸外国の調べ学習とつなげることで深め、3次は平和に向けた各自の行動の在り方について取り組む。一方、第4学年の「みんなに優しい町づくり」では、1次は「優しい学校づくり」で実践して課題追究の手順や方法を学び、2次は、実際に町へ出て行って不特定多数の人々と関わる学習に取り組む。このように、学び

の過程をステップで分け、学習が積み上がっていくことで、1年間のSDGsの学びが完成されることになる。

教科等横断的な指導については、総合的な学習の時間と各教科・領域の双方向からの作用が存在する。第6学年では、社会科の現代史や国連の働きの学習を「平和に必要な要素」につなげて考えるとともに、社会科で海外の国を調べる際には、各国が抱えるSDGsの課題や宗教問題にも子供たちが視点に入れて取り組んでいる。国語科の「学級討論会をしよう」では、「今の世界に優先して行われるべき支援は何か」を議題に、関連した2つの内容について検討する。重要性の根拠や支援方法、課題点などを指摘し合いながら討論する場となっている。話し合う価値あるものを取り上げながら、話すこと・聞くことの手も指導することはできる。本校の教員には、教科の枠に捉われない発想でカリキュラムを組み立てる素地ができています。

子供同士の学び合いには、情報の収集、整理・分析などの思考活動が伴うため、日常から適切な思考ツールを選んで活動するようにしている。その際、小型のホワイトボードを各グループに用意し、自由に書き込んだり、付箋を貼って比較したりすることができるように工夫している。第5学年の環境問題では、各自が調べた問題点の原因を「クラゲチャート」で整理し、事例同士がつながっていることに気付くことができた。様々な思考ツールを経験することで、子供が、その場に応じたものを相談して選び、話し合いに活用する姿が見られるようになった。



(3) ESD子供報告会とSDGsの浸透

本校では、2月の土曜学校公開日に合わせてESD子供報告会を教育課程に位置付けている。この子供報告会は、1年生から6年生までの子供たちが、自分たちの1年間の学びを発信するものであり、継続して取り組むことで、保護者や地域にESDやSDGsの学びの必要性を訴えるとともに、子供たちの成長した姿から学習効果を実感する場として浸透してきた。

ESD子供報告会は、どの学年も自分たちが興味・関心のある内容をテーマに取り上げ、小グループで発表する。例えば、「身近な小動物」を扱った第3学年では、トンボやダンゴムシ、ミミズなどのグループで、各小動物の特徴や住処づくりの実践について説明する。第6学年の「平和」に関する学習では、紛争と難民、貧困と支援の他、「平和」の概念についてなど、幅広いテーマのグループになる。課題を各自が深く追究する過程で、テーマが異なってくるのは自然なことである。発表方法も様々で、低学年は紙芝居やペーパーを使ってまとめる姿が見られ、日々の学習経験を反映している。高学年になるにつれ、模造紙やタブレット端末を活用し発表することが多くなるが、最近は、参観者に体験してもらい課題解決の重要性を訴えたり、意見交換の場を設定したりするグループもある。地域や保護者との双方向のやりとりを子供たちが求めるようになった。今年新たな動きは、一つのブースを作る発想で、展示や体験、語り部の配置、意見交換の場を一つのまとまりとして設定する発想が出てきたことである。JICA地球広場等での経験が生かされていると思われる。

このような子供たちに育ってきたのは、報告会を始めて4~5年が積み重なるにつれて、自由な発想を生かして意味のあるものにしたという子供の意識があるからである。子供報告会では、必ず一つ上の学年の発表を聴きに行くことを決まりとしている。上学年の発表を学ぶことで、子供たちは次年度への意識をもつとともに、質の高い学習や発信の仕方を学んでいる。



また、高学年になるにつれ、報告会を当てる上で、どのような報告会にしたいかを考えさせ、目的、内容、方法など、企画書にまとめる手順をとっている。実現したい姿があることで、主体的な発信や学びにつながっている。

(4) ホールスクールアプローチへの取組

本校では、ホールスクールアプローチを目指し、委員会活動や学校行事にSDGsの視点を取り入れ、児童の発想を生かした活動に取り組んでいる。例えば、昨年度の学習発表会では、総合的な学習の時間で学んだことを活かして、第6学年の子供たちが、現実に行っている紛争や差別、児童労働を取り上げた劇を自作して発表したほか、展覧会では、第4学年が「住みよい町づくり」をテーマに素敵な風景を描いた絵画や、町のオブジェ作りをするなど、SDGsを意識したものを意図的に取り入れている。

各種委員会では、SDGsの視点で何ができるかを考えさせ、具体的な貢献へ向けた行動力を培っている。例えば、環境委員会では、ミミズコンポストを作成し、給食の残菜を減らすとともに、ミミズコンポストでできた栄養のある土を近くの老人ホームへ寄贈したり、学校支援本部の花壇づくりに提供したりしている。また、小さくなった不要なチョークを粉末にして、ラインカーに入れたり、選挙で使ったボードをもらって黒板にし、落書きコーナーで低学年を遊ばせたりする工夫をしている。このような活動が契機となって、運動委員会による体力向上キャンペーンや、集会委員会や放送委員会でも児童企画の活動が実現するようになった。SDGsの活動が日常的に受け入れられるようになった。

(5) Happy Schools Projectの発想を活かす

本校は、今年度よりHappy Schools Projectに参加している。このプロジェクトは今まで行っていた活動を「幸福感」から見直して、価値付けるとともに、子供たちによる自治活動を教育課程に生かそうと考える契機となった。

学年によっては、子供たちによる目標やきまりづくりを任せて自治的な視野を育てようとする動きがある。例えば第5学年では、毎週全校朝会の際に集まり、学年代表の子供たちに今週の生活目標を立てさせている。短時間ではあるが、子供同士で課題や対策についての意見を交換する。時には、標語を作って教室や廊下に掲示するなど、自治的な行動につながっている。

また、代表委員会では、新たに意見ポストを設置し、子供たちから出された、学校の改善してほしい点に取り組もうとしている。出された意見の中に貸し出し用の傘の設置する要望があった。そこで代表委員会が主体となって貸し出せる傘を回収する行動につながった。「学校の小さなアンハッピーをハッピーに変える」という声掛けは、子供たちにとっても分かりやすい。前向きな姿勢で学校の生活を改善しようとする態度は、まさにSDGsにつながる、Act Locallyに値する。

(6) 地域独自のSDGsを見いだす

本校は、学校支援本部や学校運営協議会と連携し、地域独自のSDGsを見いだそうと取り組んでいる。ユネスコスクールとしてESDやSDGsの必要性を共有できたことから、学校支援本部は、「持続可能」を合言葉に自ら活動を企画し、子供の教育活動に関わるようになった。例えば、世界の課題に目を向けられるようにと、保護者の協力を募って新聞記事を読んだ考えを書く活動を子供に進めている。展覧会ではトワイライトミュージアムを企画し、ライトアップされた校舎も作品にしながら、金曜日の夜間の開放を行った。さらに、学校支援本部と同窓会、学校が協働して、音楽フェスティバルを企画し、自治会の協賛を得ながら音楽団体をボランティアで招聘して開催している。この音楽会には地域の活性化をうたったSDGs11「持続可

能な街づくり」が示されている。

学校運営協議会においては、本年度新たに、児童、保護者、教員、地域からの実践発表者を募り、互いにポスター発表を聴いて学ぶ会を企画している。学校・保護者・地域が一体となってSDGsを語り合う方向性が示されつつある。

(7) 子供の学びの姿と教員の指導観について

本校が2018年にサステナブルスクールとして発表をした際、ユネスコスクールとして3年間関わってきた、中・高学年担任の6名の教員にインタビューを行い、子供の姿と教師の指導観について調べたものがある。

<子供の学びの姿>

「子供のよさや成長した点」についての回答には、ほとんどの教員が「主体的」と「対話的」にあたる内容を挙げている。主体的な姿には、

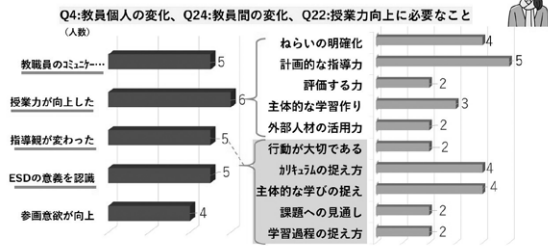
- ・やるときはやる子供たちだ。
- ・自分たちで何とかしようとする良さがある。
- ・思っていたよりも自ら考えて行動している。
- ・といった「実行力」に関するものと、
- ・行動して初めて形になるという意識がある。

といった「行動する必要性」を指摘する発言があった。SDGsの学びを始めてから「行動しなければ変わらない」といった、教員からの働きかけが児童の主体性につながり、教員自身にも子供に任せてみようという意識が出てきている。「深い学び」についての発言は少数であったが、

- ・大人みたいに環境問題を真剣に考えている。
- ・世界課題に「疑問を感じる心」が育っている。
- 等、当事者意識があることに驚きを感じている発言が出された。子供の成長を感じている。

これらは約2年前の子供の実態である。今は行動することは当たり前のこととして受け入れられ、行動したことから何を学び、どのように改善していくかが学習の中心になってきている。ESD子供報告会でも触れたように、今や、高学年の子供にとって変えたい対象は大人であり、SDGsを如何に伝えるかを話し合う姿がある。

教員の意識の変容について



<教員の指導観>

「教員個人の変化や指導に関する考え」について尋ねたところ、大きく5つの項目に分けられる。①教員間のコミュニケーションが盛んになった、②授業力が向上した、③指導観が変わった、④ESDの意義を認識した、⑤参画意識が向上した、である。これらの項目は⑤が2/3である他は、ほぼ全員が挙げている内容である。「授業力の向上」で挙げた、「計画的な指導」や「ねらいの明確化」は、独自のカリキュラムを自分たちの手で作り上げたという経験が教員の自信につながっている。「指導観」については、

- ・行動する大切さを意識するようになった。(めざす児童像の明確化)
- ・一つの教科で終わってはいけないという意識が出てきた。(教科等横断的な発想)
- ・子供が自分で伸びていく様子を、余裕をもって、これでいいのだと構えられるようになった。(主体性への根気)
- ・問い続ける大切さを理解した。(ESDの意義)などが教員から出されたコメントである。ESDやSDGsの学びを重ねることで、「主体的な学び」や「深い学び」の概念、子供の具体的な姿を捉えることができるようになってきている。

教員の指導観に、このような変容の兆しが見える要因をコメントの中から探ってみた。

【ESDやSDGsへの課題意識・価値の認識】

- ・自分も興味があったし課題だと思っている。
- ・今必要とされるSDGsの視点や価値観をもって社会に出て行ってほしい。
- ・地球人として考えられる子供になってほしい。

【本質的な問いをもつ大切さ】

- ・問いをもつことは社会で生きていく力として必要だ。
- ・探究する時間として総合的な学習の時間が分かるようになった。探究によって課題は完結することはないが、問い続けることが大事だ。

【ESDやSDGsの学びの醍醐味】

- ・与えられたものをやるのではなく、自分から作る、自分からやろうとする感じがする。
- ・子供たちが変わってきた姿を教師も楽しみながら授業をしている。新しい教育観も学べて、教員の質が変わることが一番の醍醐味である。

子供たちの教育に携わっている教師たちも、子供と共に学び、SDGsの解決に関わる実践者としての意識が高まっている。子供も教員もSDGsの学びの魅力を感じていることが、西田小学校の推進力につながっている。

3 成果と課題

(1) 課題解決に向けた子供の能力・態度

- ・発達段階に応じたテーマを設定し、問題解決学習を進めることで、当事者性として認知力が高められ、地球市民として、解決しようとする態度を育成することができた。

(2) 活動を通じた形成者としての価値観

- ・ESDやSDGsを追究する姿勢が、各種委員会活動などの日常的な活動まで広がり、世の中をよりよくしようとする社会情動的側面、具体的貢献に至る行動側面が成長した。
- ・児童が変容する姿から、教員自身がSDGsの学びの重要性や効果に気付き、実践者の一人としての自覚が芽生えた。カリキュラム作りや主体的な学びを追求する中で、教員の指導観も変化の兆しが見られる。

(3) 課題や今後の展望

- ・ポートフォリオや振り返りシートなどを活用し、児童の変容を把握し、SDGsの学びの効果と、指導の方向性を見いだす。
- ・Happy Schools Projectの視点を活かし、子供たちの自治的な活動の領域を教育課程に増やし、幸福感を感じられる学校づくりを目指す。

人とつながる 社会とつながる 未来とつながる ESD

1 はじめに

平成29年度、本校は創立70周年を迎えた。その際に、当時の生徒たちが「100周年は私たちの手で」とコメントした。それを受けて、生徒たちに「30年後の私たちは、社会はどのようになっているのだろうか、この北部のまちは・・・」と問いかけた。機会を同じくして平成29年7月に新学習指導要領前文において「～多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする」ことが求められ、これらを基に本校における「持続可能な社会づくりに資する学校教育」が進み始めた。

これまでの本校生徒は、与えられた課題に対しては真面目に取り組むことができるが、自ら考え、実践していくことを苦手としている生徒が多くいた。そこで「北部中学校で身に付けたい7つの力」を育むESDの学習を通して、校内、地域、そして世界に目を向け実践を進めていくこととした。その過程で、生徒たちは徐々に人とのつながりや世の中の動きに興味をもつようになり、校内や校外へ向けて発表・発信の機会を得たことで、言動に自信をもつようになってきた。

今年度の研究主題は「人とつながる社会とつながる未来とつながるESD」とし、昨年度に引き続き「ESD学びの地図」を基に、学校教育全体が「つながる」ことを意識した実践を行うこととした。世界的な持続可能な開発目標SDGsの理解と世界の潮流や地域社会の動向を共有してきました。また、授業等を通して実社会と自分たちの学びをつなげながら、日本や熊本、北部など地域の課題を捉え、実現可能な、かつ持続可能な活動等を見出し、具体的な実践活動を通して「持続可能な社会の創り手としての資質・能力」を育んできた。

現在では、本校を核とした教育エコシステムを構築し、ESDを推進しながら「社会に開かれた教育課程」の実現に向けたカリキュラム・マネジメントや授業の改善、「NIE教育」「オリンピック・パラリンピック指定校」「環境教育」「ICT活用」「キャリア教育」「国際教育」等、多様な機会を通して、地域とともにある学校づくりを行い、次世代教育を担う実践校としての先導的な役割を担っていきたく考えている。本年度新たに「未来とつながる」と付け加えることで、生徒自身に地域の将来、さらには自らの将来を考えさせ、「キャリア教育」の視点を合わせた学びとしたいと考えている。

2 実践内容

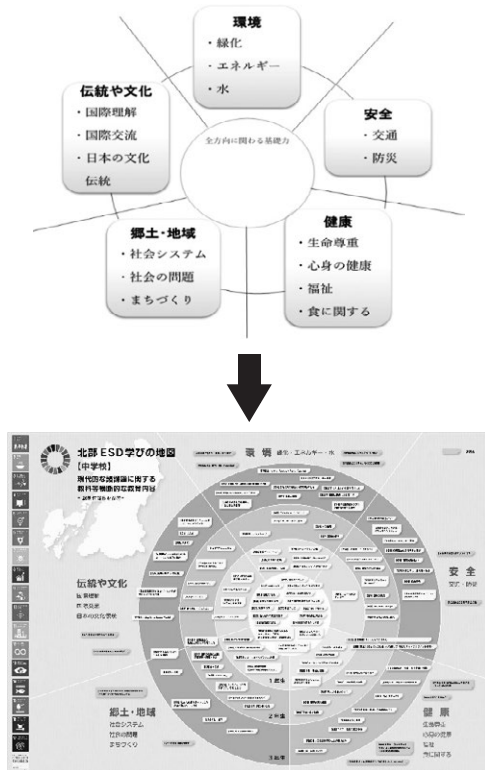
(1) ESDを軸としたカリキュラム・マネジメント、及び、学習指導の工夫改善

「持続可能な社会の構築を目指して、自立的に考え、行動する力を養う教育」を目指した、教科横断的な指導計画を整理し、教科等の指導方法等の工夫改善を行う。

①ESDで育む力である「北部中学校で身に付けたい7つの力」を明確にすることにより、各教科の授業や総合的な学習において、意図的・計画的に教育活動を進める。

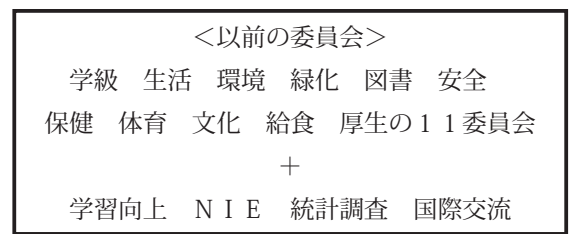


② 総合的な学習の時間と各教科等のクロスカリキュラムを「ESD学びの地図」によって可視化、整理する。(次ページ図は「ESD学びの地図」の基本構想図→完成図)



③ 生徒会の委員会活動と連動し、生徒全員が委員会に所属し、総合的な学習の時間を使った、「北部SDGs」を開設した。ここでは、通常の委員会活動とは目的の異なる、SDGsのゴールを使った取組を行っている。

→「課題発見、課題解決力」の育成。



④ NIEの活用による情報の収集・活用、及び校外へ向けた情報発信

→NIE委員会の設置

新聞各社を読み、SDGsにかかわる話題や気になる記事について、課題を発見し解決していくため、タブレットを活用し調べたり、インタビュー

したりしながら学習を進めている。(委員会での学習の様子)



→各学年のホールで「NIEコーナー」を設置し、数社の新聞を閲覧できるようにしている。



(NIEコーナー)

→各教科授業での活用

例<国語>「正しい言葉は信じられるか」事実の述べ方による、読み手に与える印象の違いについて考える学習のまとめとして、同じ記事について新聞3紙の読み比べを行った。



例<社会>

新聞記事やICTを有効活用することで、郷土に誇りを持ち、地域の結びつきや、地域の持続可能性に着目し、考察・提案をするという授業を組み立てた。(新聞記事を活用する様子)



→短学活(帰りの会)の中で、各学級輪番制の1分間スピーチに新聞を活用する。



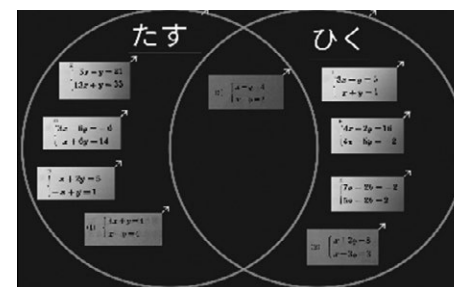
⑤ICTを有効活用した授業、教育活動の実践「ICT×教育」

→ICTを活用した授業改善

例<技術>植物の生長の観察



例<数学>思考ツールを使った学習活動



→ICT研修

ICT研修(文部科学省ICT活用教育アドバイザー 平井聡一郎氏の講演・全校授業)

- ・これからの世の中の動き
- ・ソサエティ5.0について、動画
- ・タブレットを授業へ活用する
- ・メンチメンターの活用 など

→アップル社の協力による、生徒・教師のタブレット研修

・タブレットipadが導入されたのを機に、学習向上委員会が中心となり、その使い方を知るための講習会を開いた。

・アップル社の方に来校していただき、クリップス、キーノート等の使い方を教わり、各学級に広めていった。



(2) 学校を核とした教育エコシステムの構築

本校を核として、校区にある小学校、熊本市まちづくりセンター、大学、産業機関などと連携しながら、地域全体でのESDの浸透を目指す。

①ESDコーディネーターによる教育プログラムの作成、実施

→シンポジウム「北部の未来を考える」の開催シンポジスト(熊本副市長熊本市民生員理事SDGs推進企業代表生徒3人)



→まちづくりセンター主催の「くまもとし北区SDGsフェスタ」への協力



→生徒会の代表と、地域の民生委員・PTAとの意見交換会を実施



→熊本ユネスコ協会等の協力によるグローバルな視点の共有「アフリカ子どもの日」講演
＜マリールイズ氏の講演＞



② 熊本市教育委員会の事業への協力
→「熊本市の教育を世界に発信 ～シュライヒャー局長と共に考えるeducation 2030～」への協力（シュライヒャー氏の学校訪問、講演会での発表）



→「熊本市SDGsキックオフイベント」への参加協力・発表

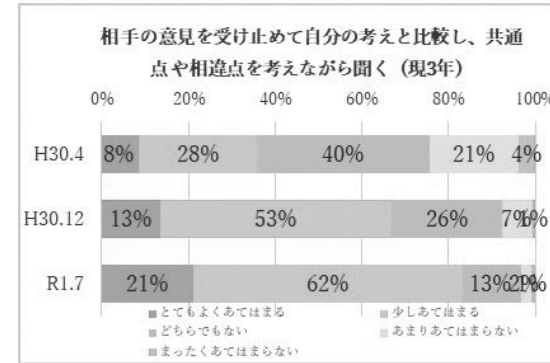
(3) 妥当性、信頼性のある評価の工夫

ESDで育成する資質や能力育成の実現状況をはかるための評価の工夫を行う。

① 生徒の変容を見取るための学校独自のESDアンケート評価の工夫

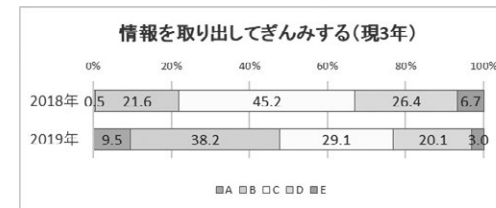
自己評価シート					
年 組 名前() 男・女					
北部中学校では、さまざまな活動が行われています。これは、みなさんにとってこれからの社会を生き抜くために必要な力や態度を身につけるための活動です。取り組むにあたって、今の自分を振り返ってみましょう。					
今の自分を、1～5段階で判定してみましょう。					
評価項目	1	2	3	4	5
I) 批判的に考える力					
① 相手の意見を受け止めて自分の考えと比較し、共通点や相違点を考えながら聞くことができる。					
② 自分の考えを筋立てて説明できる。					
③ 積極的に発展的に考え、より良い解決策を考えている。					
II) 未来像を予測して計画を立てる力					
④ 見通しや目的をもって計画を立てている。					
⑤ 他人にわかりやすく説明できるような計画を立てている。					
III) 多面的、総合的に考える力					
⑥ ものこをメリット・デメリットの両面から考えることができる。					
⑦ 身の回りの出来事を様々な側面や立場から考えている。					
⑧ 様々なことを、つながりがないか関連付けて考えている。					
IV) コミュニケーションを行う力					
⑨ 自分の考えをまとめてわかりやすく伝えることができる。					
⑩ 自分の考えに、他の人の意見を取り入れることができる。					
V) 他者と協力する態度					
⑪ 相手の立場を考慮して行動できる。					
⑫ 仲間と協力しながら、チームとして活動することができる。					
VI) つながりを尊重する態度					
⑬ 自分が様々なこととつながっているという事に関心をもつことができる。					
⑭ いろいろなものや人のおかげで自分がいることを実感している。					
VII) 進んで参加する態度					
⑮ 自分が言ったことやしたことに責任をもち、約束を守ることができる。					
⑯ 進んで人のために行動することができる。					
VIII) 地域や社会のことを考える態度					
⑰ 地域のことですすんで参加している。					
⑱ 社会がどのような状態かについて興味を持って考えている。					

評価結果例（批判的思考について）

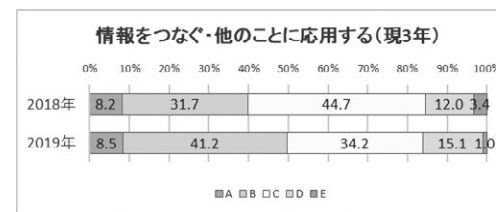


- ② 検証改善サイクル（PDCA×3）の実施
- ③ 学校関係者評価「GPS-アカデミック」モニター調査での評価の活用

評価結果例 1（批判的思考）



評価結果例 2（創造的思考）



3 成果と課題

- ESDで育む力、及び「北部中学校で身に付けた7つの力」を明確にすることにより、意図的・計画的に教育活動を進めることができた。
- 「ESD学びの地図」を作成し、教科横断的な指導計画を整理し、総合的な学習の時間を中心として教科等の指導方法の工夫改善を行ったことで、生徒・教師ともに、学習の目的を明確にした取組を進めることができた。
- 学校を核とした「教育エコシステム」の構築などを通じて、校区内小学校、地域全体に向けたESDの浸透を進めることができた。
- ESDで育成する資質や能力育成の実現状況をは

かるための、評価の工夫と、評価を基にしたアプローチを行うことができた。（昨年度の結果から比較すると、「GPS-アカデミック」の結果では、各分野Aの値となる生徒が増加している。）

- 情報をつなぎ、新たな解決策を生み出す能力について、依然として、批判的思考や協働的思考に比べて、情報の活用や応用する能力である創造的思考の育成が課題となってくるのが分かった。
- ESDカレンダーの代わりに「ESD学びの地図」を作成したが、教科横断的な指導は分かりやすくなったが、各教科での身に付けさせたい力の検討・実践がやや弱くなった。
- 総合的な学習の時間に位置付けた委員会活動だが、それぞれが探究となる学習活動を全委員会（全職員）で構築していく難しさがある。
- ESDで培った資質・能力と「ICT×教育」として取り組んだことの成果の結び付き、さらに「キャリア教育」に結び付ける際の検証の在り方が検討課題として残った。

<今後の取組>

- 本校研究テーマ「つながる」ことを意識した、学校全体、各学年、各委員会で、持続可能な学習活動を検討し実践に結び付ける。
- 総合的な学習の時間と各教科等の横断的なつながりを再考し、「ESD学びの地図」のバージョンアップ図り、指導案や資料もweb上で閲覧できるようにし、活用できるものとする。
- ESDの取組を、キャリア教育につなげていく。（全九州キャリア教育・進路指導研究発表会令和2年10月23日予定）

高等学校賞

広島県立安古市高等学校
企画研修部主任 煙井 成

持続可能な社会の実現をめざして —ESDの視点から課題解決に挑戦する—

1 はじめに

本校は、広島市安佐南区にある全日制普通科の高等学校である。世界遺産「原爆ドーム」から北へ10kmほどのところにある毘沙門台と呼ばれる高台に立地しており、1,000人（24クラス）を超える生徒・教職員が、授業・特別活動・行事等において日々活気あふれる学校生活を送っている。

校訓「仰高」（心豊かな人生の創造をめざし、高遠の理想を仰ぐ）のもと、広島を愛し、これからの社会に貢献できるリーダーを育成することを使命として、さらに具体的に育成すべき生徒像として次の3点を掲げ教育活動に取り組んでいる。

- 高い志を掲げ、生涯にわたり学び続けることができる生徒。
- 自他を愛し、自覚と誇りを持って自分で考え行動できる生徒。
- 持続可能な社会の担い手として、異なる価値観を持った人と協働できる生徒。

急激な国内外の社会変化に対応しつつ、グローバル課題の解決に意欲的に取り組む人材を育てることが急務となっている現代において、学校教育が担う役割も大きく変化してきているとの認識のもと、教育活動総体で「主体的・対話的で深い学び」に向けて取り組んでいる（表1）。

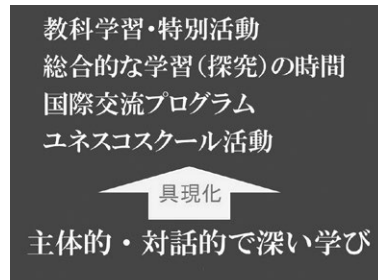


表1 教育活動総体で学びの変革を具現化

ユネスコスクールに加盟して7年目を迎えるにあたり、第10回ESD大賞「高等学校賞」を頂くという榮譽に浴し、喜びとともにさらなるESDの前進を期しているところである。

この機会にこれまでの取組を整理し、今後を展望してみたい。

2 実践内容

(1) 取組経過

現代社会は、ますます高度化・複雑化し、既存の知識・技能や価値観だけでは対応しきれない課題が山積している。各分野におけるイノベーションによりグローバル化も加速度的に拡大・深化している中で学校現場に求められるものも多様化している。中でも従来型の知識・技能の習得に留まらない、生徒個々の探究力の育成が強く打ち出されるようになった。

本校では、10年前から総合的な学習の時間において「持続可能な社会の実現をめざして」という統一テーマで講演会やディスカッションを実施していたが、ユネスコスクール加盟を機会としてユネスコ憲章の理念をさらに敷衍する活動に取り組むようになった。具体的には、2015年に平成27年度日本/ユネスコパートナーシップ事業の一環としてACCUがコーディネートされた「ESD Foodプロジェクト」への参画である。これは、ユネスコスクール(国内7校とインド5校)による「食」をテーマとした国際協働学習であった。

このプロジェクトを通してESDの基礎的な視点を学ぶことができた。また2015年は、国連でSDGsが採択された年であり、その際には、日本語訳が出る前に生徒が原文(英文)を訳出して、国際社会の抱える課題について考える機会をもった。2016年には後継となる平成28年度日本ユネスコパートナーシップ事業においてESD重点校(サステナブルスクール)に選定され、取組の深化をめざすこととなる。

ESDの視点から協働的な探究活動に求められる基礎的なスキルの習得を図る。		
1 年次 入門編	①切抜き新聞作品作成 ②読書会(ビブリオバトル) ③ディベート	班活動:主に新聞から情報を収集し、分析・整理・総合して、他者に表現する。 個人・班活動:主に文献(新書)から情報を収集し、分析・整理・総合して、他者に表現する。 班活動:多様な手段を活用して情報を収集し、分析・整理・総合して、他者に表現する。
	個人による活動により、探究活動に求められる普遍的な諸能力の伸長を図る。	
	①知の冒険(課題探究) ②スタディツアー(修学旅行)	個人活動:生徒個々の関心領域から、課題を発見・設定し、年間を通して情報収集、分析・整理・総合・表現のサイクルを繰り返し、論文作成、ポスター発表等を経て、さらなる伸長を図る。 班活動:様々な現場に赴き、現状を把握した上で課題発見及び解決策の提示に取り組む。
3 年次 発展編	個人的な関心領域から社会的課題へと探究領域を拡大し、協働的に課題発見・解決に取り組むことで、探究活動に求められる普遍的な諸能力の深化を図る。	
	①パネルディスカッション	個人・班・クラス・学年活動:2年次の探究活動を踏まえ、SDGsに提示されたグローバルな課題と向き合い、協働して探究し、学年全体で活動内容の共有と集団討議を行う。活動の成果を卒業論文としてまとめる。

表2 総合的な学習(探究)の時間の概要

この頃広島県では「学びの変革」(「主体的な学び」の創造)に向けた取組が全県的に始まり、本校ではESDを踏まえ、生徒自身が主体的・対話的な学習プロセスにより学びを深めていく課題発見・解決型の学習にむけた「学びの変革」を志向することとなる。

(2) 総合的な学習(探究)の時間の取組

①総合的な学習(探究)の時間のカリキュラムの概要は表2の通りである。

1年次には、探究の基礎的なスキルの習得をめざしている。まずSDGs基礎学習を行い、SDGsからの課題設定、情報収集・分析を重ね、新聞切抜き作品を制作し、発表する。2年次は、個人で課題を設定し、探究活動を行う。生徒全員が探究の過程と結論、成果と課題を示す資料を作成し、ポスター発表会を実施する。3年次には、2年次での探究活動とSDGsとの接点をさらに考察し、探究活動の成果をSDGsに活かす方策を提案する。提案の一部は、2・3学年生徒全員と保護者に対してプレゼンテーションを実施し、引き続き「持続可能な社会の実現をめざして」をテーマにパネルディスカッションを実施している。今年度は、ジェンダー、難民、災害、地域活性化などについてのクラス発表後、学年全体でSDG4(質の高い教育)について討議を行った。

②1年次の取組について

SDGs基礎学習では、3年生が1年生の教室に向向いて授業を行っている(図1・2)。



図1・2 3年生によるSDGs授業

3年生は教師役となり、これまで学んできたことを、クイズやゲームを用いながら班討議・発表を促すなど様々な工夫を凝らして後輩に伝えている。

その後1年生は、各班で課題設定・探究活動に取り組む、その成果を新聞切抜き作品として発表する(図3・4)。



図3 新聞切抜き作品例

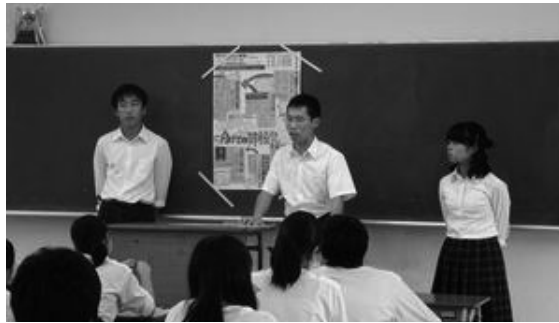


図4 成果物による発表

夏季休業中には、次年度の個人探究に向けた読書に取り組み、2学期には各自の読書体験を他者に伝える読書会を行う。その後、大学と連携しディベートの手法を学び、社会的課題について他者との討論を通して論理的・批判的に思考し、より高いレベルでの解決策の構築をめざす練習を行う。

③2年次の取組について

2年次には個人での探究活動に取り組んでおり、これを「知の冒険」と名付けている。皆に失敗を恐れず、好奇心と探究心をもって「知」のフィールドで冒険をしてみようという趣旨である。

多様なテーマ設定のもと、1年間をかけて探究する。1学期には、テーマ設定と計画書の作成に取り組み、大学院生を招いて検討会を実施している(図5・6)。



図5・6 研究計画書検討会

夏季休業中と2学期にかけて、本格的に活動し、年末には探究の経過と内容をまとめた論文とポスターを作成する。1月末に、全員が体育館を使ってポスター発表を行い、多くの参加者から質問や意見を頂くプログラムを実施している。(図7～9)。



図7 ポスター発表会全景



図8・9 ポスター発表会

ポスター発表会自体も生徒実行委員会を立ち上げ、生徒主体の企画・運営を行っている。

さらにポスター発表会での意見交流を参考にし、論文の修正を行い、年度末を迎える。

④3年次の取組について

3年次には3か年の探究活動の集大成としてパネルディスカッションに取り組んでいる(図10)。



図10 パネルディスカッション

このプログラムにおいても、生徒による担当者会議が立ち上げられ、今年度是非討議したいテーマをSDGsの中から選定し、討議のための基調提案と学習資料を作成する(図11・12)。

各クラスでの事前学習・討議を経て、学年全体での討議を行うが、その場には法曹・大学・マスコミなど各界の専門家に参加していただき、さらなる討議の広がりや深まりをめざしている。



図11 討議テーマの設定



図12 基調提案発表

またディスカッションに向け、各自が取り組んだ「知の冒険」における探究テーマとSDGsとを結び付け、いかなる課題の解決にどのように貢献できるかを考察し、発表・討議している。

一見無関係な探究内容からでもグローバル課題にアプローチする過程を経験することで、よりイノベティブな解決策を模索してもらおうというねらいがある。クラス内での発表・討議を経て、クラス代表が学年全体で共有してほしい内容を2・3年生、保護者に対してプレゼンテーションを行った(図13・14)。



図13・14 各クラス発表

(3) 国際交流(国際協働学習)の取組

①姉妹校交流について

豪州の姉妹校との交流は20年に及び、近年は語学研修やホームステイに加え、平和・人権学習や地球環境問題をテーマにしたワークショップやディスカッションを継続して実施している(図15・16)。



図15・16 姉妹校との交流

②広島県主催プログラムへの参加について

広島県主催の「ひろしま国際ジュニアフォーラム」「グローバル未来塾inひろしま」に生徒が参加し、平和構築に向けた国際協働学習に取り組んでいる(図17・18)。



図17・18 ジュニア国際フォーラム

③ユネスクool活動について

文部科学省委託事業である「フードプロジェクト」「サステナブルスクールプロジェクト」に継続して参画した。国内の学校とインド・インドネシアを結んでの国際協働学習であり、前者では食を巡る諸問題について探究し、成果を互いに報告・討議した(図19・20)。



図19・20 フードプロジェクトでの調査・発表

後者では、ホールスクールアプローチに向けた学校間交流を通して、「ホールスクールアプローチデザインシート」を作成し(図21)、教育活動の全体像を再確認すると共に、UNESCO Associated Schools Networkによるビデオ制作に協力させていただいた(<https://aspnet.unesco.org/en-us>参照)。



図21 ホールスクールアプローチデザインシート

また、今年度は、SCoPA(パリ協定に関する学生会議)による国際協働学習に参加すると共に、気候変動行動サミット(ニューヨーク、国連本部)では、イベントとして開催されたユースサミットでのパネルディスカッションに代表生徒が参加し、意見交流を行った(図22・23)。

さらに、第11回ユネスコスクール全国大会では、「ワールドピースゲーム」参加生徒が、利害の対立するシビアな国際関係の中で平和構築をめざすシミュレーションに取り組んだことを報告した。その他にもグローバルクラスメイトや様々な海外研修プログラムを活用し、活動内容の深化を図っているところである。



図22・23 ユースサミット・パネルディスカッション

(4) 地域連携の取組

広島市郊外の小高い団地に位置する本校は、以前から2つの取組を通して地域住民との連携を図っていた。その一つは、学校周辺のゴミや雑草の除去などを行う地域清掃活動であり、もう一つは、地域の方の指導のもと、近くの山から切り出してきた松・竹などを使って門松を作る文化継承活動である(図24)。

4年前近隣の全ての自治会長と代表生徒が地域課題について話し合う機会を得た。その際に地域の高齢化、独居家庭・空家の増加などが、コミュニティの機能低下や防災上の大きな懸念事項として取り上げられた。そこで、このような地域課題に対して、自治会・社会福祉協議会などと連携を進めている。



図24 門松作り

図25 “絆”の前で

地域のコミュニティ復活を目指して、地域住民のための「ふれあいセンター“絆”」が設立され、本校の美術部員が地域の方々の思いを、その建物(旧消防職員官舎)へ壁画装飾するなど、協力関係を築いた(図25)。

2014年の豪雨災害では大きな被害が発生した地域であり、本校生徒も1名が犠牲者となっており、

大きな危機感も共有される中、実践的な防災・減災について地域の方々と共に学び、災害発生時に具体的な行動がとれることを目指して自治会・消防署・学校が合同で防災訓練を行うようになり、地域との連携はさらに深まっている(図26・27)。



図26 車いすでの搬送訓練

図27 AED講習会

3 成果と課題

以上様々な切り口で諸課題について認識を深め、関連付け、解決策を模索し、具体的な行動へと繋ぐ取組を重ねてきた。しかしながら、まだ道半ばというほかない。特に地球環境問題については、深刻化の度を増しており、有効な緩和策と適応策の策定・実行について、より深く認識・実践することが求められている。

審査員特別賞

学校法人静岡理科大学 星陵高等学校
教諭 鈴木 崇司

バイオメタンを利用した新しい暮らしを提案する教育プログラム

1 はじめに

現代は情報化、グローバル化、およびAIの進化により、社会構造が大きく変化している。そのような予測困難な時代には、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだす力が求められる。また、主体的に向き合っており関わり合い、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていける人材の育成が求められている。学校教育を通じてよりよい社会を創る目標を社会と共有することは、社会に開かれた教育課程の展開が可能となるだけでなく、次世代の人材に求められる思考力・判断力・表現力や学びに向かう人間性等を育成する機会ともなる。新しい教育課程においては、探究的な学習を通して課題解決の資質・能力を培うことが重視されており、新しい力の育成には従来の教科の枠を越えた横断的な学びの機会も必要になっている。そこで本校では、生徒が主体的に学びを深める機会を幅広く提供し、地域と一体となって社会が求める能力を育成することに力を入れている。その一つに、「星陵ラボプロジェクト」や「学生が提案するAIoTスマートシティプログラム」などの探究活動がある。これらの活動の実践を通して、フェアでオリジナリティのある教育プログラムの構築を目指している。今年度は、20の研究グループで延べ約150人の生徒が希望して探究活動を実施している。今回は、審査員特別賞をいただいた活動であるバイオメタン研究についての紹介をする。

近年の貧困、環境、およびエネルギー問題は国際的な社会問題に発展し、解決のためには様々な国が協働して持続可能な社会を構築することが求められている。これらは、持続可能な開発目標(SDGs)として示され、本校でも身近なと

ころから何かできないかと学校行事や課外活動として取組を開始している。本校では、3年前から再生可能エネルギーのバイオメタンに関する研究を開始した。バイオメタンとは、生ゴミなどの有機性廃棄物を微生物のはたらきで生成できる可燃性のガスで、再生可能エネルギーとして利用できる。また、バイオメタン生成後の残差は消化液と呼ばれ、作物栽培の際の液体肥料として利用することができる。この嫌気発酵処理は、生成したガスと残差の両方を活用できるため、無駄のないシステムとなる。しかし、この消化液はバイオメタン施設に投入する原料と同量が発生することから、農地が十分でない地域にとっては経済性や効率を優位にする大規模化した施設の導入は大きな課題になる。そのため、本校では小規模のバイオメタン施設を開発し、地域に分散して配置するシステムの普及の検討を行っている。地域内の狭い範囲の資源循環を可能にすることで、広い地域全体の資源循環も可能になると考えている。これまでに、東北大学と連携した小規模バイオメタン施設の開発と実運転試験、教材として開発した模型装置を使った室内試験、消化液を液肥として有効に活用するための栽培試験、バイオメタンを利用した資源循環型の社会モデルの提案などを行っている。最終的には、地域の人が主体的に運転管理を行うバイオメタン施設を利用した持続可能な資源循環型の社会の構築を実現したいと考えている。また、これにより、「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、「住み続けられるまちづくりを」、「つくる責任つかう責任」、「気候変動に具体的な対策を」などの国連が定めた持続可能な開発目標(SDGs)の12項目の達成に貢献できると考えている。

2 実践内容

(1) 小規模バイオメタン施設の開発と実運転試験

H27年度に、校内にバイオメタンを生成する施設の設置を行った。他のバイオメタン施設から微生物を種菌としていただき、ドッグフードを原料に馴養させることで立ち上げ作業を行った。H28年度には、投入する原料を生徒の家庭の生ゴミに切り替えて運転を継続した。バイオメタン量を連続で記録できる流量計、計測機器や各種分析器具の導入により、生徒だけで主体的に運転管理を行える施設環境を整備した。H29年度には、バイオメタン施設を継続して連続運転を行うとともに、生徒の課題研究活動として室内実験や消化液を使った栽培実験をさらに進展させた。H30年度からは、バイオメタン施設に投入する生ゴミの量を多くした負荷試験を行い、さらに専門的な分析などを開始した。施設の運転・維持管理については、探究的な活動(課題研究)を希望する生徒を募集し、空き時間や放課後などに活動を行った。生徒の家庭の生ゴミは週に1回生徒が分担して朝に回収し、施設には週に1~3回に分けて投入を行った。



写真1. 校内に設置した小規模バイオメタン施設

発酵槽は38℃になるように温水循環装置のお湯をタンク外周にまきつけたチューブに流すことで温度を調節した。夏場は施設を設置しているコンテナ内が40℃近くになることから、夜間以外はほとんど加温の必要がなかった。冬場においては、45℃以上の湯温が必要になることがあったが、簡易な温水の温度調節をすれば十分に運転が可能となった。温水循環装置のトラブルが年に3回ほど起き、発酵槽の温度が10℃近くまで下がることがあった。しかし、温度が元に戻るとガスの生成も

従来通りに確認できたことから、変動にも強いシステムとなっていることが明らかになった。運転開始後のメタンガスの濃度は60%程度であったが、生ゴミの投入を開始した以降においては、65%を上回る高い濃度が確認できた。従来のバイオメタンシステムと同等かそれ以上のメタン濃度を達成できていることから、順調な運転ができていることを確認できている。



写真2. 原料(生徒の家庭の生ゴミ)の回収の様子

(2) 模型装置を使った室内試験

バイオメタンについて学習する機会として、①バイオメタンの調べ学習、②大学教員からの専門的な講義、③模型装置を用いた室内実験を行った。3つの実習は、4クラス約100名を対象に6回にわたり総合的な学習の時間を活用して実施した。これらの活動により、専門分野への興味・関心の向上、専門知識の注入、課題の発見と解決策の考案などを行った。

大学教員による出張講義では、バイオメタンが生成する仕組みやそれに関する微生物のはたらきについての説明を受けた。微生物のはたらきを利用することで、廃棄物からエネルギーを作ることができること、その微生物は様々な連携をとって物質を変換していることを学んだ。

模型装置は、ペットボトルを発酵槽に見立て、キャップにチューブコネクタを接着し、ガスバッグをチューブで接続して作製した。ガスバッグはジップロックをシリコンで接着して安価にすることで、1個あたりの模型装置の値段を数十円で作製できた。投入する原料の量、種類や管理方法(攪拌の有無)は班毎に自由に設定した比較実験を行った。模

型装置は38℃の恒温槽内で3週間程度保管した。発生したガス量の測定を行い、他の班ともデータを共有して各班の実験結果の振り返りとまとめた結果の発表会を行った。材料の違いによりガスの生成量が異なることから、他の班のデータとの比較で様々な意見が出され、さらなる課題の発見を促す機会ともなった。



写真3. 大学教員による講義の様子



写真4. 模型装置による室内実験の様子

(3) 消化液を使った栽培試験

地域の空きスペースや家庭菜園でも消化液を有効に活用するために、消化液を使った最適な栽培方法の確立を目指した検討を行った。具体的には、①プランターでの栽培試験、②発芽試験、③根の成長比較試験、④水耕栽培試験などをこれまでに実施した。①の活動については、総合的な学習の時間(実験方法の検討と発表会で合計3回)や夏期休暇などを使い2クラス64名を12班に分けて行い、②~④の活動は希望者に放課後の時間などを活用して実施した。

プランターでの栽培試験では、トマトとナスを

用いて消化液を与えた苗と与えていない苗で生育の仕方などを比較した。各班で消化液の使い方や観察項目を検討し、作業や記録の分担をして実習を行った。記録を整理してプレゼン発表を行い、概ねどの班でも消化液の有用性を明らかにしていた。虫の付き方や糖度を測った班もあり、班により特色の異なる発表となった。



写真5. 栽培実験の発表会の様子

発芽試験では、3日目以降から発芽が始まり、7日目以降ではほとんどの区画で発芽が観察された。これは水を用いた栽培ポットの方が若干遅かったものの、水を用いた場合(13区画で発芽率86%)と消化液を用いた場合(14区画で発芽率93%)で発芽への影響に大きな差はみられなかった。

根の成長比較試験では、定植後の14日、38日、51日経過したものを採取して長さを計測した。根の伸長は消化液を与えた方がやや速いものの、長さには大きな差はみられなかった。主根と側根の成長量については、消化液の方が多くなる傾向が観察された。そのため、消化液の施肥により、根の生育には良い効果があると考えられた。

水耕栽培試験では、消化液の原液と5倍希釈の液の試験区は1日目から生育の阻害がでており、その後の成長は不可能だった。10倍希釈の液においても、3日程度は生育したものの、その後の大きな成長は不可能な結果となった。生育が可能な希釈濃度は15倍以上の液を用いた場合で、特に25倍以上希釈した場合で生育により効果をもたらすことが分かった。



写真6. 栽培試験の様子

(4) 資源循環型の社会モデルの提案

本活動では、小規模バイオメタン施設を地域に導入し、地域の生ゴミを活用した資源循環型社会を提案している。生成したバイオメタンは、地域の施設や店舗などで燃料として使用し、消化液は家庭菜園や地域内の農地などで活用することで、小さい範囲の資源循環を可能とするシステムを検討している。

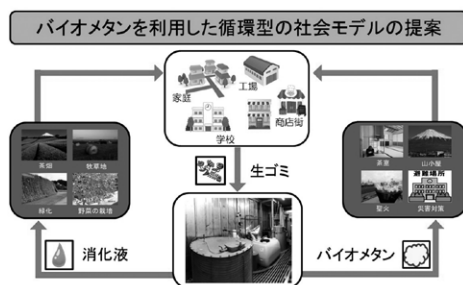


図1. 資源循環型の社会モデルのイメージ図

バイオメタンを地域に普及させるため、イベント等で情報発信を行い、バイオメタンへの理解や関心を高めてもらう機会を毎年行っている。また、地域の小学生を対象に、環境学習としてバイオメタンを学んでもらうイベントも開催した。特に、生成したバイオメタンをオリンピック・パラリンピックの聖火の燃料として利用することを目指した普及活動は毎年継続している。もし実現することができれば、再生可能エネルギーを利用した世界初の聖火になるだけでなく、地域にバイオメタンを普及する大きなきっかけになると考えている。本校を含めた全国の小中高生が生成したバイオメタンを利用して、石巻にある聖火台で燃焼試験も実施した。

広報活動を生徒主体で行うことで、小学生でも理解がしやすくなり、地域住民も興味を持ちやすくなったりするなどの効果があった。活動をしている生徒にも、地域住民などの意見を参考に課題を設定して積極的に活動するようになるなど、良い影響が出ていた。



写真7. 地域の小学生への環境学習の様子



写真8. バイオメタンの燃焼実験の様子

3 成果と課題

(1) 「持続可能な社会づくり」に向けて見出した課題

どんなに優れた技術でも、地域の住民が主体的となって活動に取り組まなければ地域に根ざした技術に成熟することはない。誰もが参加できる環境・地域・人に優しい街づくりのための持続可能な取組を地域の特性を活かしたオリジナリティある仕組みとしてデザインすることを意識した。経済性や効率を意識した従来の大規模で集中型のシステムではなく、地域に密着した身近な資源循環を可能とする小規模で分散型のシステムを構築することを検討した。低コストで管理が簡単な小規模バイオメタン施設の開発とバイオメタンを利用した資源循環型の新しい暮らしを提案する活動を展開した。

(2) 課題解決のために生徒が身につけた能力や態度

得られた知見や資料を基に情報を整理して客観的に理解する力や仲間と協働して努力を継続する力を身につけた。また、小規模バイオメタン施設を普及する広報活動を円滑に進めるために他者へわかりやすく思いや考えを伝える力を身につけた。バイオメタンをオリンピック・パラリンピックの聖火の燃料として利用する目標を達成するために既存の知識や技術にとらわれることなく、新しい視点で物事を見つめなおす力を身につけた。

(3) 活動を通して育んだ資質や価値観

課題の解決には、解なき問いに向き合い仲間と共同してやり抜く力が求められる。そして、自らの思いや考えを他者と意見を交わしながら推敲してまとめる力が重要であった。日々の作業が単調になる中でも新たな課題を見いだそうとする態度が新しい解を生み出すきっかけとなることも学んだ。地域に根ざしたシステムを構築するためには、自分の地域に愛着をもって貢献しようとする姿勢が大切で、他分野の課題と連携した解決を試みることで地域の特性を活かした新しい観光資源の創造や地域の活性化の手段となることが分かった。

本活動における実験は、教科書に載っている答

えのある確認実験とは異なる。そのため、何かをやるたびに様々な失敗をしてきた。しかし、そのような経験が、忍耐力、思考力、判断力などを身につける良い機会となっている。バイオメタンの研究・普及を通して、持続可能な社会の形成やSDGs達成への貢献だけでなく、日々の生活を見つめ直すとともに、人々とのつながりの重要性についても改めて考える機会となった。

(4) 活動を終えての課題や今後の展望

研究をすることで、分からなかったことを科学的に検証して考えることの重要性を学ぶことができた。そして、検証によってさらなる疑問も持つこともできた。実験をすることは大変であったが、科学へさらなる興味をもち、研究活動をさらに続けていきたいと思うようになった生徒も多かった。今後は、学内での研究活動だけでなく、地域での実証試験などの実践例をさらに増やしていくことを目指している。

地域への普及では、富士宮の観光資源を活かした地域の活性化を実現したい。バイオメタンを富士山の山小屋で燃料として利用すること、消化液でチャノキを育て、バイオメタンで沸かしたお湯でお茶を提供するバイオメタン茶室の導入を目標にしている。さらには、地域の資源循環の構築だけでなく、太陽光や風力発電を組み合わせた電力自立型の小規模バイオメタン施設を発展途上国に導入し、資源循環の仕組みを海外でも実践することも挑戦したい。

ベスト・アクティビティ賞

名古屋国際中学校・高等学校
教務主任・国際理解教育推進主任 黒宮 祥男

多様なネットワークを活用した都心型ESDモデルによるグローバル人材の育成

1 はじめに

本校は、愛知県名古屋市にある私立中高一貫校で全日制中高一貫コースと普通科・国際教養科からなり、2020年度からは普通科に国際探究コースと国際バカロレアコースを併置する。「国際人」になれるよう、建学の精神である「開拓者精神（フロンティア・スピリット）」を基軸として、国際教養が自然に身につく教育環境づくりを行っている。そして、若者による社会的活動を通じて「21世紀のグローバル社会において、本質を見極めようとする強い意識を持ち、持続可能な開発を担うことができる人間」の育成を行っている。2014年ユネスコスクール認定校、2016年ESDの深化による地域のSDGs推進事業サステイナブルスクール認定、2019年地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）に採択されるなど先進的な教育活動を進めている。

2 実践内容

(1) 背景・目的

本校は、外国語教育や世界の国々における社会課題を探究する授業、海外研修などグローバルな視点を重視したカリキュラムを実践してきたが、グローバルで学習した知識や体験をベースに地域（ローカル）課題との比較や地域と協働することで生徒が多様な考えを持つことができるのではないかと考えた。また、学内の個々の実践が散在している現状や都市部における環境問題への取組の難しさを改善すれば、より体系的な学習環境が実現できると考えた。そこで、グローバルとローカルな実践活動を連動させることで、“グローバル”な視点で持続可能な社会の実現を考えることができる人材の育成を目指した。その目標を達成するために、ユネスコスクールなどのネットワークを活

用し、国内外の学校や地域・NPO・企業等との交流を増やし、学校・教員・生徒が相互に協働できるグローバルで新しいESD環境づくりを実践した。この環境では、さまざまな分野の人と人との交流の場・機会が創出され、多様な情報も集積され、比較的都市部でも、ESDに関する情報や実践例をより身近に感じることができる。こうした環境を整えることは、グローバルな学習空間と学校の壁を越えた交流を容易にでき、若者による積極的な社会的活動を通じて、「21世紀のグローバル社会において、本質を見極めようとする強い意識を持ち、持続可能な開発を担うことができる人間」の育成ができる。将来、常に地球環境や地域課題などの社会課題を視野に入れながら、自らの社会活動の場で活躍する人材を創出できる。

〈本校が掲げるグローバル・リーダーの
5つの国際的素養〉

- 国際的な視野に立って思考する能力
- 外国語でコミュニケーションする能力
- 寛容な態度をもって問題を解決する能力
- 物事を主体的に探究する能力
- 自らを省察して多面的に評価する能力

(2) 活動による効果

ユネスコスクールなどの事業や国内外からの人と情報の集積地・発信地の中心（ハブ）としての役割をすることにより、ESDの相関ネットワークが形成された。その結果、「多様なテーマ、多様な人びと、多様な取組」を知ることにより、生徒・教員の活動にも多様性が生まれ、自由で主体的な心が育ち、1つのテーマではなく自らの興味や志に沿った多様な探究活動が生まれた。そうした活動を昇華させるために、SDGs・貧困問題・環境

問題・水の問題などに関する生徒の組織が生まれ、ESDネットワークを活用し校外の人びとと交流・協働する積極性がうまれた。そして、互いの組織の取組や情報を報告会などで共有することにより、異なる視点で考えることができ、物事を多面的に考えることもできている。また、海外研修や外国人教員・留学生との交流によりグローバルな活動を行うことで得られる視点を持ちつつ、学校周辺の地域や名古屋市/愛知県などのローカルの課題を考えることができる。ビデオカンファレンスなどローカルでの実践を世界へ発信できる環境も有効的であった。

このようにグローバルとローカルの学びの中にSDGsを意識しつつ活動を行うことで持続可能な社会の実現のために中学生・高校生として何ができるのかという考えが生まれ易くなっている。

(3) アクティブな実践 - 外部交流

①学校・学年単位での交流

中学2年生校外学習では、愛知県佐久島での海岸清掃活動を実施した。この活動は、愛知県西尾市役所佐久島振興課及び佐久島の島おこしの代表者の協力のもと実現し、清掃以外にも島おこしの経緯等を学び、課題解決のヒントを得た。



【海岸清掃（愛知県佐久島）】

また、海外への国際理解研修も行っている。中学3年生は、イギリスのロンドンでグループごとにフィールドワークを実施。あるグループは、テムズ川等でパックテストによる水質調査を行い、地元愛知県に流れる天白川の水質との比較を行った。水に関する調査では、高校課程のシンガポ

ル・マレーシア研修においてニューウォーターセンター視察や水をテーマにしたフィールドワークを行った。また、シンガポール大学での講習では、エコツーリズム・オーバーツーリズムなど視点からまちづくりの在り方を学習した。



【シンガポール大学講習】

② テーマに沿った外部交流を目指す組織

SDGsを軸とし、持続可能な社会の実現を目指すために若者らしいアイデアで多様な活動をするSus-Teen! (Sustainable-Teenager!)、フェアトレードを探究するKFC (Kokusai Friend Coffee)、ペットボトルキャップ集めからマイクロプラスチック問題を考えるCAPなど多彩な自主組織が誕生した。特に、Sus-Teen!の挑戦は、イベント出展から有識者へのインタビュー、SDGsアンケート型玩具「Sus-ガチャ」の製作など多岐にわたるアクティブな挑戦が多い。以下、その主な活動を紹介する。

(a) 外部イベントへの参加

環境デーなごや2018,2019やSDGsイベントなど地元で開催されるイベントやエコプロ2018,2019（東京）に参加している。特に、学校の事例発表以外に「Sus-ガチャ」を製作し、展示を行った(大人用と子供用の2台)。これは、SDGsのゴールを押すと景品が出る玩具である。どのゴールを押すかは、体験してくれた方が「SDGsのゴールのどの実践を行っているか」あるいは「どこに興味を持っているか」を考えてもらい、押しってもらう。その結果、SDGs17のゴールの内、現在どのゴールが多く実践されているか、興味を持っているかを楽しみながら調査することができる。その集計表も同様に展示し、

興味を持った来場者と共にその結果について、議論をすることも多々あった。



【エコプロダクツ2018出展東京】



【環境デーなごや2019出展（名古屋市）】

また、「Sus-ガチャ」の展示依頼も増え、名古屋市の環境イベント（ららぽーと名古屋港店）や青年会議所（JCI）主催のSDGsイベント（名古屋ドーム前イオン、オアシス21）、静岡県湖西市のSDGsイベントへ出展している。



【SDGsイベント出展（イオンナゴヤドーム前）】

(b) 多彩な交流

交流は、県外の学校とも盛んに行われている。広島県福山市立福山中学校・高等学校への訪問（2017年・2019年）や宮城県石巻市立牡鹿中学校の来校（2019年）では、両校の実践報告やSustainable Teenager 宣言の作成等を行った。両校の生徒たちは、始めは緊張した様子が見られたが、両校の実践報告後の休憩時間などリラックスした時間になると普段の学校生活や趣味の話など和気あいあいと会話が広がっている様子がうかがえた。また、地域性や歴史などを学ぶ上で両校生徒において多くの学びの時間となった。



【牡鹿中学校交流（本校）】 【福山中学校交流（福山）】

また、国連地域開発センター主催のバンコク都のためのSDGs推進研修(2018年)において、バンコク都庁職員14名及び国連職員2名が本校を訪問し、本校の実践発表やSDGsのワークショップを行った。



【バンコク都庁職員交流】

北海道ニセコで開催されたSDGs高校生未来会議では、日本国内外の高校生が集まり、SDGsのテーマごとにその解決法を議論・プレゼンテーションを行った。議論や発表などすべて英語による活動であり、英語の重要性についても再認識することができた交流会となった。名古屋市主催のオース

トリア・ジロング市との湿地提携に基づく人的交流事業では、2018年/2019年にそれぞれ1名ずつが選ばれ、愛知県の藤前干潟とジロング市の湿地調査を行った。他校生徒との議論やオーストラリアでのフィールドワーク、事後研修や報告会を経て、生徒の見知が大きく成長したと言える。



【SDGs高校生未来会議（北海道）】



【オーストラリア/ジロング市交流】

2018年には、ユネスコ/ACCU主催のビデオカンファレンスに参加しモンテネグロ・インドネシア、ナミビアの学校と気候変動をテーマに自校の実践報告と意見交換を行った。地域とのつながりとしては、名古屋市環境局の協力のもと酸性雨や光化学スモッグ、NO₂の調査を行った。酸性雨については、反応が出やすいアサガオを種から育て、葉と花にその影響の有無を確認した。また、地元の伝統野菜である「八事五寸人参」について調べるため名古屋市農業センターに訪問し、人参の生育の観察や種子の採取などの作業を行った。



【名古屋市農業センター】

【名古屋環境局】

3 成果と課題

(1) 成果

ネットワークを拡充することによって学校内外での交流の機会や情報が増え、その内容も多彩になった。その結果、コミュニケーション力やプレゼンテーション力、そして、アイデア創出力の向上が見られた。2019年、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局/内閣府地方創生推進事務局主催のSDGsまちづくりアイデアコンテストでは、Sus-Teen!の3名が応募し、全国186作品の中から優秀賞に選ばれた。2019年11月9日地方創生ワカモノ会合（全国8カ所で開催）の一環として、「SDGsワカモノ会合 in 名古屋」が開催。授賞式及びプレゼンテーションに参加し、「ええがや、なごや」というテーマで、地域活性のアイデアのプレゼンテーションを行った。



【SDGsワカモノ会合授賞式（名古屋市）】

また、こうした活動が評価された結果、有識者とのネットワークが形成され、多くの方々へのインタビュー活動も活性化された。トヨタ自動車社長の豊田章男氏や壺番屋創業者の宗次徳二氏らへのインタビューなど多くの方との交流は、生徒たちへ多様な思考の提供と実社会で必要な創造力・実践力などの育成を促し、学校では学

ぶ事ができない貴重な体験を創出している。

(2) 課題

今後の学校教育活動をより効果的に、より本校らしいアクティブな活動にするためには、2つの取組が必要だと考える。まず、活動をよりアカデミックにすることである。その実現のため地元天白川に焦点をあて、水とまちづくりをテーマに系列校である名古屋商科大学や名古屋市及び日進市と連携し、フィールドワークを中心とした探究活動を推進していく予定である。2019年12月には、天白川の源流地点で水質調査を行い、専門家によるフィールドワークの手法や市民科学の講義を受けた。

2つ目に、それぞれの主たる活動を学校全体へ広げ、生徒全員がSDGsに関心を持ち、自らの取組により、自身の進路決定に何かしらの一助となるような体制づくりを推進していくことである。総合的な探究の時間で実践しているキャリア教育の再考もその一例である。キャリア教育のテーマに「地元企業・SDGsの実践がある」などの地域性・国際性を含めた調査を加えることにより、学校全体で社会課題を考える機会を増やしている。

4 最後に

本校の特色は、「フットワークの軽さ」である。都市部・国際教育・比較的学校の歴史が新しいなど新しい取組に対してチャレンジしやすい、情報が集まりやすい環境である。その環境を余す事なく活用し、多様な生徒のやる気を満たすことが大切なポイントである。そのために学校外の研修やイベント、コンテストなどの情報を受診するためのアンテナを常に張り巡らし、積極的にコンタクトを取る姿勢が必要である。そして、教員と生徒が協働し、何事にもチャレンジする。「学びとは、楽しいもの」という姿勢を大切に。学校教育環境を時代の変化に合わせて、積極的に改善していく。「生徒にとっての教師は、学校外にもいる」という認識を持つ。そうした思いで、これからの教育活動を持続していきたい。

スタートアップ賞

静岡県立駿河総合高等学校
総合学科企画課長 深澤 邦洋

ESDの持続発展を目指して～機関包括型アプローチと多様な実践～

1 はじめに

(1) 学校及び教育活動の概要

駿河総合高校は、2013（平成25）年4月開校の単位制総合学科高校である。教育目標に「適切な判断力を持ち、個性を確立すると共に、他者と協働し主体的に社会に貢献する人を育てる」を掲げ、その具現化の柱の一つに「地域と連携する開かれた学校づくりとESD for SDGsを意識した地域社会発展への寄与」を挙げている。生徒一人ひとりが豊かな生き方・在り方、学び方・働き方を追求するキャリア学習と、習得した知識・技能を持続可能な社会づくりのために活用する態度を養うESD for SDGsを掛け合わせ、「キャリア探究 with SDGs 支援プログラム」を策定し、機関包括型アプローチをとると同時に、総合学科高校ならではの多様な科目や課外活動などの延長で、多彩なユネスコスクール活動を展開している。

本稿では、2018年度と2019年度の主な実践内容について報告する。

(2) ユネスコスクールとしてのプロジェクト

本校は、特別支援学校の分校（高等部）を併置している学校、静岡県内唯一の都市型総合学科高校、静岡市駿河区唯一の公立高校といった特性を持っている。それらの特性を踏まえ、2018年7月のASP-net加盟認証以前から以下の4プロジェクトに取り組んでいる。

I 共生・共育プロジェクト

II 地域課題・国際問題解決方法提案プロジェクト

III 地域活性化・国際貢献アクションプロジェクト

IV 進路目標実現プロジェクト

これらのプロジェクトの総括は、2018年度までは学校長を長とするESD推進本部が、2019年度からは校務分掌である総合学科企画課が担っている。

(3) キャリア教育×ESD推進体制の持続発展

ユネスコスクールには機関包括型アプローチによるESD推進が期待されている。機関包括型アプローチを成立させるためには、教職員の共感共鳴と協働共創が必要になる。本校では、ESD推進本部や総合学科企画課が校務分掌横断・年次部縦貫のハブ的役割を担って、「キャリア探究 with SDGs支援プログラム」の理解普及と実践促進に努めている。

①分掌横断的・学年次縦貫的な仕組み

先ずキャリア教育の理解普及については、総合学科企画課と進路指導課が連携して、生徒だけでなく、保護者や教職員にも分かり易いように、【目的】と【内容】を端的に説明している。

【目的】

状況においても豊かに生きる自活力と受援力を養うこと。

【内容】

自分の興味・関心や能力・適性といった志向性の自覚を促す学習、産業社会の変化や実相などを的確に理解する学習、納得のいく生き方・在り方や学び方・働き方を追求する計画を立てる学習、課題に気付き解決を目指して行動する学習など。

高校卒業後の就職先や進学先の獲得という当面の課題だけに終始せず、高校入学以前を「これまで」、高校生活3年間を「いま」、卒業直後の進路を「これから」、25歳や30歳の時点などの遠い未来を「その先」と区分設定して、「その先」を起点に全ての区分を結び付けて考える。

また、1年次は「(知っているを) 広げる」、2年次は「(よく調べ・比べて) 選ぶ」、3年次は「(志を立てて) 挑む」といった簡潔な表現による年次テーマを定めて、「キャリア探究 with SDGs支援プログラム」の名称で進路指導課が発行する『進路のしおり』に掲載している。

年次	キャリア探究 with SDGs 支援プログラム (進路指導課発行)	内容	実施時期	担当
1	キャリア探究 with SDGs 支援プログラム	「知っているを」を広げる	10月	進路指導課
2	キャリア探究 with SDGs 支援プログラム	(よく調べ・比べて) 選ぶ	10月	進路指導課
3	キャリア探究 with SDGs 支援プログラム	(志を立てて) 挑む	10月	進路指導課

資料1 『進路のしおり』掲載資料

次に、前述の「納得のいく生き方・在り方や学び方・働き方を追求する計画を立てる学習」の実践については、教務課と進路指導課との3分掌と1・2年次部が協働で取り組んでいる。総合学科高校である本校では、1年次の秋と2年次の秋に、翌年度の履修科目を選択・登録する。科目選択に臨む考え方はキャリア開発の観点から総合学科企画課と進路指導課が主導し、履修上の制約や登録・変更等の手続きは教務課が主導し、個々の生徒の相談は年次部が担当している。

更に、ESD、SDGs、ESG投資など、紛らわしい用語の概念や関係性については、総合学科企画課と研修課が連携して、教職員向けに計画的に校内研修会を実施している。2018年度は、カードゲーム2030SDGsを体験したり、17種類のSDGsアイコンを使って進路指導関連事業とSDGsの関連付けを分析したり、本校を会場にESD・国際化ふじのくにコンソーシアムの研究会を開いたりした。

2019年度は、日本ユネスコ協会やほごも教育研究奨励会などの団体から助成を受けて、経済に関わる諸課題、社会に関わる諸課題、環境に関わる諸課題などについて学校外部の専門家や活動家などを招いての講演などを行った。



資料2 2018年度校内職員研修風景

【2016年12月 中教審答申】
ESDは次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である

【2017年3月 幼稚園教育要領】
【2017年3月 小・中学校学習指導要領】
【2018年3月 高等学校学習指導要領】
前文および総則に、持続可能な社会の創り手の育成

【2017年12月 国連総会】
ESDが「質の高い教育に関する持続可能な開発目標に不可欠な要素であり、その他の全ての持続可能な開発目標の実現の鍵であることを確認



資料3 2018年度校内職員研修資料の一部

② 管理職のリーダーシップ

学校長の提案により、一人ひとりの教職員によるESDやSDGsを意識した実践を「ESD実践録」としてデジタルデータで蓄積する取組がスタートしている。実践録の量的増加は、キャリア教育だけでなく教科指導においてもESDやSDGsを意識した実践や教職員間の情報交換・共有を促進することになった。特にSDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」を意識して、「知識構成型ジグソー法」や「学び合い」といった協同学習理論に基づく授業改善や、スマホやタブレットなどのICT機器を使った授業改善、基本的知識や技術の習得から活用や探究へと発展させる授業改善などの記録が共有されるようになり、質的向上に繋がっていると考えられる。

③ 学校外部との連携・協働

1-(3)-①でも言及したESD・国際化ふじのくにコンソーシアム、日本ユネスコ協会、ほごも教育研究奨励会の他に、総合学科企画課がコーディネートして、静岡市、NPO、公共施設、民間企業との協働による事業を計画的に実施している。学校外部の方との打合せには、校内の事業担当教職員も同席する。事業の意図や運営の仕方などについて直接対話することが教職員の当事者意識を高め、ESD推進体制の持続的発展に通じると考えている。

本校におけるキャリア教育の【目的】は、生徒個人に強く生きる力を身に付けさせることに傾注しているのに対し、ESD推進の目的は、賢く優しくより善く生きる力を育むことに比重を置いている。厳密な境界線を引けないことを承知の上で、一先ず整理することで教職員の理解を促進して水平的な展開を図っている。

2 実践内容

「キャリア探究 with SDGs支援プログラム」は、総合学会において全ての生徒が必ず履修する教科「産業社会と人間」に、「総合的な学習/探究の時間」、「LHR」を軸に据えた学習活動（共通実践）と、生徒一人ひとりの志向性自覚と将来展望に基づいた個別の学習活動（個別実践）の二軸に沿って展開している。ここでは、共通実践に比重を置いて主な事例を報告する。

(1) 共通実践

1-(2)-I II III IVに関連付けられる学習活動には、全ての生徒が取り組んでいる。

① 共生・共有活動

併置している静岡北特別支援学校南の丘分校(高等部)の生徒達と、体育祭や文化祭などの行事に協働して取り組むだけでなく、授業や課外活動を通じた日常的な交流機会を設けている。互いの人格や個性を認め合い、支え合う人権尊重意識を自然に養成することができている。

人権尊重感覚はSDGs達成には欠かせないものであるため、2019年度は特に、SDGsの目標5「ジェンダー平等を実現しよう」に焦点を当て、性同一

性障害当事者による講演+座談会を実施した。



資料4 駿河総合高校 園芸部・南の丘分校 園芸班合同学習

本校では、外部講師を招いての特別授業を実施する際には、年次全体授業や全校授業の後に、有志生徒が講師を囲んで講義内容を深掘りする座談会を実施している。

② 生徒がつくる授業

SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」を実現するには学習者自身が主体的に学びに向かう姿勢が必要であると考え、各年次に応じて有志生徒が授業を企画・実践した。1年次生は、NPOしずおか共有ネットの支援を受けながら、斜めの関係に位置する大人達と車座になって語り合う「将来を考えるワークショップ」を行った。2年次生は、思考力・判断力・表現力を鍛える活動として「ビブリオバトル」を行った。3年次生は、探究的な学びの楽しさを共有する活動として、夏期休業中に開かれる中学生一日体験入学で、「課題研究中間報告」を行った。

③ 明示的にSDGsについて学ぶ特別授業

SDGsに対する当事者意識を醸成するために、校内にSDGsに係わる掲示物を貼ったり、国連が定める記念日についてクラス担任が朝のSHRで生徒に紹介したりするなどしている。並行して、SDGsの経済・社会・環境・統治などの側面を考慮して、専門家や活動家を招いての特別授業を1年次から2年次にかけて計画的に実施している。2018年度から2019年度にかけては、日本エシカル協会の末吉里花代表理事、静岡市資源循環体験プラザの重

岡廣男農学博士、大正大学の浦崎太郎教授、フィンランド大使館のマルコス・コッコ報道・文化担当官などに特別授業を実施していただいた。フィンランド大使館の協力が得られたのは、駐日欧州連合代表部がコーディネートしている国際理解教育事業「EUがあなたの学校にやってくる」に応募したことによる。



資料5 意識啓発のための校内掲示



資料6 2年マルコス・コッコ氏家族との交流

④新聞を活用した志向性分析と地域研究

本校は2014~2016年度の3年間、静岡県NIE推進協議会の指定を受けたNIE実践校だった。指定校期間終了後も組織的なNIE実践を継続している。

新聞社による出前授業や新聞コラム執筆者による特別授業を起点に、1年次の3学期から新聞スクラップノートづくりを始める。2年次4月、無意識に収集した記事の傾向から志向性分析を行う。スクラップノートというエビデンスを根拠とした志向性分析に基づいて、SDGsの目標11「住み続けられるまちづくりを」を意識しながら各自

「静岡の〇〇」というテーマを設定する。その後は意識的に自分の地域研究テーマに関連性のある新聞記事スクラップを継続する。2年次3学期からスタートする進路探究ゼミでは、地域の縛りを外し、SDGsの目標8「働きがいも経済成長も」を意識しながら、目指す学問分野や業界・業種などに焦点化した新聞記事スクラップを継続する。なお、生徒の新聞スクラップノートについて、教職員がコメントを加えることは控えている。

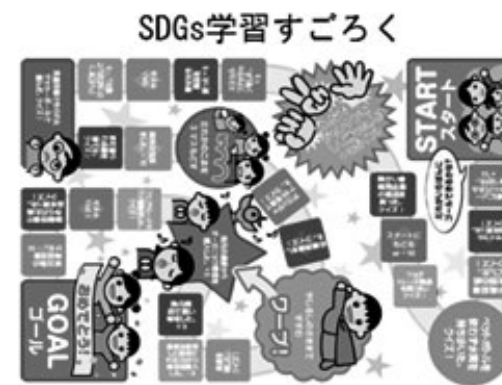
新聞スクラップノートというエビデンスを拠る所に潜在意識を顕在意識化させ、主体的な学びや納得のいく進路実現に繋げるという取組は、教職員の負担感もなく、組織的实践が持続している。

(2) 個別実践

1-(2)-IIⅢに関連付けられる学習や活動は、生徒の志向性自覚に基づく選択履修科目や所属部活動などを通しての実践である。本校には6種の系列(国語や地歴・公民科目を中心とした人文社会系列、数学や理科を中心とした自然科学系列、商業科目を中心としたビジネス総合系列、工業科目を中心としたものづくり総合系列、美術を中心としたデザイン系列、家庭、福祉、体育科目を中心とした生活文化系列)が用意されていて、2年次からは自分が軸とした系列科目を中心に多様な科目を組み合わせて学んでいる。そのため、習得した知識・技能を、SDGsと関連付けて活用する実践も多様だが、ここでは3つの事例を報告する。

① 高校生出前授業

商業科目を中心に学ぶ生徒集団は、アウトプットを前提とした学習がインプット・インテイクを充実させるという仮説に基づいて、本校近隣に立地する小学校の放課後子ども教室で自作の「SDGs学習すごろく」を使った出前授業を行った。小学生はゲームを楽しみながら、高校生に対して色々な質問を投げ掛けてくる。質問に回答することや小さな子供達と接する体験などが、高校生自身のSDGs再考やゲーム改良といった探究に繋がっている。



資料7 出前授業用「SDGs学習すごろく」

② 習得した技術を活用する地域マップづくり

デザイン系列科目を学ぶ生徒集団は、静岡市駿河区池田地区の古老からの相談を受けて、地元の口承伝話を盛り込んだ「池田散策マップ」を作成した。実際に現地を歩き、その地に残る昔話を取材した上で、イラストレーターやフォトショップ等のソフトウェアを駆使しながら探究心も発揮して、親子向け、若いカップルのデート用、旅行者向けなど、多様なマップを完成した。



資料8 多様な「池田散策マップ」

③ 学校菜園化・孤食研究の協働

園芸部では、2016年度から学校花壇の菜園化に取り組み出した。その際、家庭の生ゴミと放置竹林の竹を伐採して出てきた竹粉を混ぜ合わせた竹粉堆肥や近隣の日本平動物園の動物糞を使用した有機栽培を行っていた。2017年、栽培技術が上達して安定して収穫できるようになると、市内で子ども食堂や食育活動を展開しているNPOや任意団体に、無償で食材を提供する活動を始めた。2019年、家庭科で孤食について研究している生徒が、子ども食堂や食育活動の現場に調理ボランティアとして参加するようになった。園芸部員も調理ボランティアに参加した生徒も、子供達からのお礼の手

紙に感激し、部活動や研究に、それぞれ意欲を高めることに繋がった。



資料9 有機栽培野菜の無償提供

3 成果と課題

(1) 成果

2019年12月初旬、2年次生が研修旅行で沖縄を訪れ、焼け落ちた首里城を目の当たりにした。生徒会本部の呼び掛けで、首里城復興支援募金がスタートした。2学期末までに集まった募金を日本ユネスコ協会連盟が協力と呼び掛けている「首里城復興ユネスコ募金」に献じた。授業を通して、部活動を通してのESD実践は、基本的に教職員主導のものが多いが、純粋に高校生主導の実践が出始めたことはESD実践を地道に続けて来たことの成果である。

(2) 課題

学校内外における多様なESD実践に、教職員の価値観共有と学校外部の理解・支援は欠かせない。しかし、まだまだ価値観共有や相互信頼が十分確立されているとは言えない。意味ある実践を行うには、限られた時間の中できちんと話し合い、どこかで折り合いを付けることが肝心である。本校の様に機関包括型アプローチと多様な実践の二軸でESD推進を図る場合、多様な実践の方が際限なく広がってしまう心配もある。制御可能で持続発展が期待できるよう、大枠となるプロジェクトを省察し、再設定することが当面の課題である。

第10回ESD大賞
受賞校実践集

発行日：令和2年3月16日

発行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40

Tel：03-3295-7051

Fax：03-3295-7054

E-mail：info@jp-esd.org